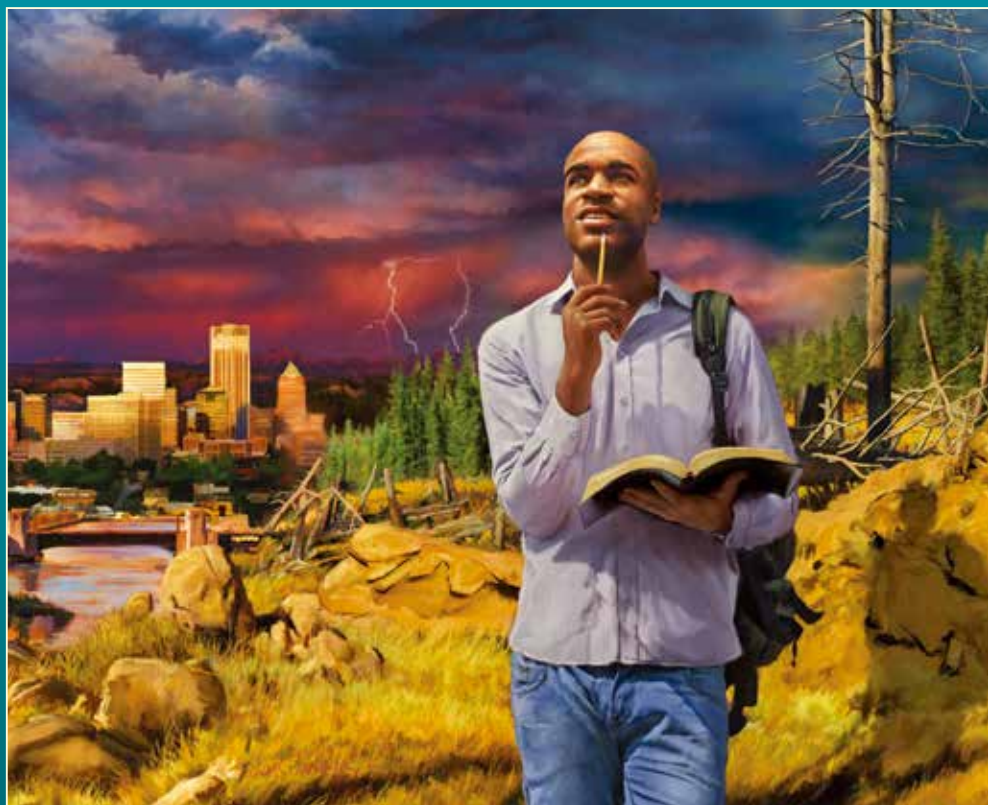


終末時代への備え

PREPARATION FOR THE
END TIME



イエスに会う準備をする

安息日学校の 4つの目的

1 聖書の学び

3 地域伝道

2 交わり

4 世界宣教

今 期 の 参 考 書

今期の副読本

●『キリストの再臨に備えて』（仮題）

ノーマン・ガレー著 村山晴穂訳

A 5 判 定価 1,050 円(税込) セブンスデー・アドベンチスト教団安息日学校部発行

聖書と証の書から、キリストと終末の諸事件との関わりを論証しています。創造主への礼拝とキリストによる律法の回復に対する悪の霊による争闘についての認識は、教理を学ぶ者にキリストの働きへの中核的理解を与えてくれます。

● 伝道局安息日学校部ホームページ、お役立ち「今週のポイント！」

数種類、毎週の聖書研究ガイドのポイントが掲載されています。前の週の金曜日にはホームページに載っているものがありますので、次の週に学ぶ内容の予習としても使うことができますし、日毎研究の参考としてポイントを見ながらガイドを学ぶこともできます。ダウンロードまたは直接印刷してお使いください（伝道局 HP の「安息日学校」から「聖書研究ガイドのポイント」をご利用ください）。

<http://cm.adventist.jp>

● ホープチャンネル

聖書研究ガイドの解説動画（毎週更新）を見ることができます。教師・司会の方が予習のために利用したり、みんなで安息日学校の時間に見たりできます。動画の最後にはディスカッションのテーマを紹介しています。

<http://www.hopechannel.jp/church-channel/> 動画 /ml/ 聖書研究ガイド

はじめに

(キリストと時の終わり)

肉体を取られたイエスの地上での生涯が終わる頃、彼は弟子たちに次のような慰めの言葉をかけられました。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている」(ヨハ 14:1～4)。

弟子たちは、イエスが言われたことの意味も、彼の約束が成就する時についても完全には理解できませんでしたが、そのお言葉によって慰められたことは確かです。「父の家にある住む所とは?」「イエス御自身が用意してくださる場所とは?」間違いなく、今、弟子たちがこの世で見つけられるどの場所よりも、そこは良いところでしょう。

さらにほどなくして、イエスは弟子たちと一緒に座っておられたときに、彼が戻られる前に起こるであろうことを簡単に描写されました。それは「未来の歴史」のようなものであり、すばらしいものではありませんでした。戦争、戦争のうわさ、敵対する国々、飢饉、地震などはみな、「苦しみの始まり」にすぎないと、イエスは言われました。迫害、裏切り、欺き、苦難も迫っていました。

今日、歴史の流れの中で私たちが有利な地点から見ると、イエスが警告されたことのほとんどすべてが、彼の予告どおりに起こってきたのを目にすることができます。時に関する二つの大きな預言の成就も見ることができます。その一つは、ダニエル 7:25 の「一時期、二時期、半時期」(黙 12:6、14、13:5、民 14:34 も参照) に関する預言で、その時は西暦 6 世紀 (538 年) に始まり、18 世紀末 (1798 年) に終わりました。もう一つの最も長い時の預言、つまりダニエル 8:14 の 2300 日も、1844 年に成就しました。

こうして私たちは今、確かに「時の終わり」(ダニ 12:13) に生きています。しかし私たちは、(イエスの再臨によってクライマックスを迎える) その終わりがいつ来るのか知りませんが、それを知る必要もありません。私たちが知っている必要があるのは、終わりが来るということ、その時に備えができていますということだけです。

どのように備えればよいのでしょうか。その答えは、たぶん次の聖句の中に見いだされます——「あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストに結ばれて歩みなさい」(コロ2:6)。言い換えれば、世界の多くの出来事、多くのニュース、終末時代に関する多くの説によって注意がそらされやすいということ。私たちの備えの唯一の鍵であられるキリスト御自身ではなく、キリストの到来につながると思われる事柄に目を向けすぎてしまうということです。

今期の焦点は終末時代ですが、それがすべてというわけではありません。本当の焦点は、イエス（ただし、終わりの時との関連におけるイエス）と、いかに終わりの時に備えるかです。確かに私たちは、歴史的年代、世界の出来事、歴史そのものに目を向ける必要があります。聖書が最後との関連においてそれらについて語っているからです。しかしそのような文脈の中でも、聖書はイエスについて、彼らがどのようなお方であり、私たちのために何を成し遂げ、今何をなさり、再臨の時に何をされるのかについて語っています。キリスト、しかも十字架につけられたキリストが、私たちの信仰の中心でなければなりません。パウロが言ったように、「なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです」(Iコリ2:2)。私たちが彼に焦点を合わせれば合わせるほど、私たちはますます彼のようになり、ますます彼に服従し、そして近い将来においても、最後（主を愛する者たちのためにイエスが用意してくださった「場所」に入る日）においても、私たちを待ち構えているあらゆることにますます準備ができるのです。

〈著者〉ノーマン・ガレー（南部アドベンチスト大学組織神学特任教授）

今期のテキストはセブンスデー・アドベンチスト教団世界総会安息日学校部より提供された大人用ガイド標準版英文原稿を教団翻訳部が日本語に翻訳したものを元に教団安息日学校部でリライト・編集したもので、必ずしも英文ガイドを直訳したものではありません。編集にあたっては最終校閲を安息日学校協力牧師（池増信男、新名幹二、堀内一誠、安居益也）、校閲・校正を福音社編集部にご協力いただきました。口語訳聖書、新共同訳聖書からの聖句引用に関しては、日本聖書協会の承認を受けております。引用聖句および聖句箇所表記は原則として新共同訳聖書を使用しております。

目 次

(終末時代への備え)

はじめに	1
第1課 宇宙規模の争い	4月 7 日… 4
第2課 ダニエルと終末時代	4月 14日…11
第3課 イエスとヨハネの黙示録	4月 21日…18
第4課 救いの計画と終末時代	4月 28日…25
第5課 天の聖所におけるキリスト	5月 5 日…32
第6課 誰が律法を「変更」したか	5月 12日…39
第7課 マタイによる福音書 24 章と 25 章	5月 19日…46
第8課 天と地を創造された神を礼拝せよ	5月 26日…53
第9課 サタンの終末時代の惑わし	6月 2 日…60
第10課 アメリカとバビロン	6月 9 日…67
第11課 神の刻印か、獣の刻印か	6月 16日…74
第12課 バビロンと最後の戦い	6月 23日…81
第13課 私たちの主イエスの再臨	6月 30日…88

© 2018 General Conference of Seventh-day Adventists®. All rights reserved.

いかなる個人、団体も、セブンスデー・アドベンチスト世界総会からの文書による事前の許諾なくして、安息日学校聖書研究ガイドのいかなる部分も編集、変更、変造、改作、翻訳、複製、出版することを禁じます。セブンスデー・アドベンチスト世界総会の各支部が、具体的な指針に基づき、安息日学校聖書研究ガイドの翻訳の手続きを行う権限を有しています。ただし、このような翻訳とその出版の権利は、世界総会に留まるものとします。また、“Seventh-day Adventist” “Adventist”、およびその炎のロゴマークは、セブンスデー・アドベンチスト世界総会の登録商標であり、世界総会からの事前の許諾なくして使用することを禁じます。



宇宙規模の争い

暗唱 聖句

「竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者たち、すなわち、神の掟を守り、イエスの証しを守りとおしている者たちと戦おうとして出て行った」 （黙示録 12：17、新共同訳）

「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った」 （黙示録 12：17、口語訳）

今週の 聖句

エゼキエル 28：1、2、11～17、創世記 3：1～7、
黙示録 12：1～17、ローマ 8：31～39、黙示録 14：12

安息日 午後 3/31

今週のテーマ

聖書の世界観は、「大争闘」とも呼ばれる宇宙規模の争いであり、それが私たちの世界の、さらには全宇宙のドラマが展開する背景となっています。罪、苦しみ、死、国々の盛衰、福音の宣布、終末の諸事件——こういったことはみな、この宇宙規模の争いという背景の中で起きるのです。

私たちは今週、この争いが根づくことになったいくつかの重要な場面に目を向けます。この争いは、ルシファーという完全な存在の心の中でなぜか不可解にも始まり、彼は別の完全な存在であったアダムとエバを墮落させることによって彼の反逆を地球に持ち込んだのです。大争闘は、ルシファーの墮落、それに続く私たちの最初の両親の墮落という、これら二つの「転換点」に起源を持ち、それ以後ずっと激しく続いています。私たち1人ひとは、この宇宙規模のドラマの一部です。

しかしありがたいことに、大争闘はいつの日か終わるだけでなく、キリストがサタンに対して完全に勝利する形で終わります。しかもさらに感謝すべきことに、イエスが十字架で成し遂げてくださったことの完全さゆえに、私たちはみな、この勝利にあずかることができるのです。そしてその勝利の一環として、私たちが、必ず再臨されるイエスによって約束されているすべてのことを待つ間、神は私たちを信仰と服従へ召しておられます。

もし宇宙規模の争いが聖書の世界観の背景を成しているとしたら、このことは多くの疑問を引き出します。重要な疑問の一つは、「いったい全体それはどのように始まったのか」というものです。愛情深い神が宇宙を創造されたのですから、悪、暴力、対立などが最初から被造物の中に組み込まれていたと考えるのは、理にかなっていません。この争いは、当初の創造とは関係なく生じたに違いなく、創造の必然的な結果では決してないのです。それにもかかわらず、争いはここに存在し、現実であり、私たちはみな、それに巻き込まれています。

問1 エゼキエル 28：1、2、11～17 とイザヤ 14：12～14 を読んでください。ルシファーの墮落と悪の起源について、これらの聖句は何と述べていますか。

ルシファーは天に住む完全な存在でした。なぜ彼の中に、とりわけそのような環境の中で、不義が生じたのでしょうか。私たちにはわかりません。聖書が「不法〔不義〕の秘密の力」（Ⅱテサ 2：7）について述べているのは、たぶんそれが一つの理由なのでしょう。

神が御自分のあらゆる知的被造物にお与えになった自由意志以外に、ルシファーが墮落した理由は存在しません。エレン・G・ホワイトが深くも次のように記したとおりです。「罪の存在を理由づけようとして罪の起源を説明することは、不可能である。……罪は侵入者であって、その存在について理由をあげることができない。それは神秘的であり、不可解であって、その言いわけをすることは、それを弁護することになる」（『希望への光』1836 ページ、『各時代の大争闘』下巻 228 ページ）。

「罪」を「悪」という言葉に置き換えても、この文は通じます。悪の存在を理由づけようとして悪の起源を説明することは、不可能です。……悪は侵入者であって、その存在について理由を挙げることができません。それは神秘的であり、不可解であって、その言い訳をすることは、それを弁護することになるのです。

◆ 自由意志に関するあなた自身の経験を思い浮かべてください。自由意志を用いて行う選択について、なぜ私たちは折りつつ、慎重に考えるべきなのですか。

私たちは、悪がなぜ生じたのかを説明できませんが（なぜなら、悪を正当化する理由は存在しないからです）、聖書は、それが天においてルシファーの心の中に始まったことを明らかにしています。エレン・G・ホワイトの著作物から得られる興味深い洞察（例えば、『各時代の大争闘』下巻 第29章「罪惡の起源」参照）を除けば、それがいかに天で始まったかについて、聖書はあまり記していません。しかし、悪がいかに地上で生じたかについては、もっとはっきり述べています。

創世記3:1～7を読むと、アダムとエバの過失責任を示すことが起きました。ここでとても悲しいのは、エバが、彼女とアダムに神が語られた言葉を覚えていたという点です。彼女は、「でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました」（創3:3）と、その言葉を繰り返しています。聖書からわかる範囲では、木に「触れる」ことについては何も記されていませんが、エバは、木の果実を「食べる」ことが死をもたらすという真実は知っていました。

するとサタンは、公然とあからさまにその言葉に反論しました。「蛇は女に言った。『決して死ぬことはない』」（創3:4）と。

これ以上にはっきりした対比はありえたでしょうか。最初、エバへのサタンの接近は巧妙なものでしたが、ひとたび彼がエバの注意を引きつけ、彼女が抵抗していないとわかれると、サタンはあからさまに主の命令に異議を申し立てました。そして悲劇的なことは、エバは知らないという立場で行動していませんでした。エバは、「知りませんでした、わかっていませんでした」と主張できなかったのです。

エバは確かに知っていました。知っていたにもかかわらず、エバは間違ったことをしてしまったのです。エデンという完璧な環境の中であっても、知識そのものは、彼女（や、同じく真実を知っていたアダム）が罪を犯させないようにするには不十分でした。私たちは、今自分を救うのに知識だけで十分だなどと考えて、自分自身をごまかすべきではありません。確かに、私たちは、神の言葉が語ることを知る必要があります。しかし、それを知るとともに、私たちは聖書が語ることに従うという一種の降伏（こうふく）も必要としているのです。

◆ 神のおっしゃったことと、サタンの言ったことは違いました。アダムとエバは知識を持っていたのに、サタンの言葉に耳を傾けました。何千年にもわたって、ほとんど変わっていないということについて考えてください。どうしたら私たちは同じ種類の間違いを犯すのを避けられるのでしょうか。

私たちの最初の両親が罪を犯したことで、この世は、罪、悪、死の中に沈み込みました。直接の原因や非難されるべき者について、人々の意見は異なるかもしれませんが、この地上に私たち全員を苦しめる混乱、暴力、変動、対立が存在することを、だれが否定できるでしょうか。

私たちは**宇宙規模の争い**、**宇宙規模の対立**について語ります。まさにそのとおりなのです。しかし、この対立の宇宙的起源が何であれ、それはこの地上においても繰り広げられています。実際、聖書の多くの歴史は（エデンにおける墮罪からイエスの再臨につながる終末の諸事件に至るまで）、さまざまな意味で、聖書による大争闘の説明です。私たちはこの争いのただ中に生きています。神の言葉は、何が起きているのか、何がその背景にあるのか、最も重要なことに、それがどのように終わるのかを私たちに説明してくれます。

黙示録 12:1～17 を読むと、戦いが天と地上で繰り広げられていることが描かれています。天における一つの戦いととも、地上における複数の戦いが見られます。最初の戦いは、「竜」（サタン〔黙 12:7～9〕）と「ミカエル」（ヘブライ語の意味は「神に似ている者はだれか」）との間のものです。反抗的なルシファーはサタン（敵対者）として知られるようになりました。サタンは被造物にすぎませんが、永遠の創造主なるイエス（ヘブ 1:1、2、ヨハ 1:1～4）に立ち向かっています。

ルシファーは自分の造り主に反逆していました。大争闘というのは、戦う神々に関する争いではなく、自分の**創造主**に反逆し、その反逆を地上の被造物をも攻撃することで明らかにした**一被造物**に関する争いなのです。

天においてキリストとの戦いに敗れたサタンは、キリストが人間として誕生された直後、地上でキリストを狙おうとしました（黙 12:4）。しかし、そこでのキリストとの戦いに負け、続いて荒れ野で、のちに十字架で敗れ、（カルバリーでの不可逆的敗北ののち）サタンはキリストの民との戦いを始めました。この戦いはキリスト教史の大半を通じて激しく続き（黙 12:6、14～16）、最後まで（同 12:17）、つまりサタンがもう一度敗れる時（今回はイエスの再臨）まで続くでしょう。

◆ 黙示録 12:10～12 を読んでください。ほかの聖句の中に見られる争いや対立のただ中であって、私たちはこれらの聖句にどのような希望を見いだしますか。

黙示録は、教会史のかんりの部分において神の民が遭遇する迫害を予告しました。黙示録 12:6 (黙 12:14 も参照) の預言的 1260 日は、教会に対する迫害が続く 1260 年を指し示しています。

「ネロのもとで、パウロが殉教したころに始まったこのような迫害は、その激しさに多少の差はあったが、数世紀間続いた。キリスト者は、極悪非道な犯罪を犯したものとして偽って訴えられ、飢饉、疫病、地震などの災害の原因であるとされた。彼らが、一般社会の憎悪と嫌疑的となると、密告者たちは利益のために、罪のない者を裏切った。彼らは、ローマ帝国の反逆者、宗教の敵、社会の害毒であると非難された。数多くの者が円形劇場で、野獣の餌食になり、生きながら火で焼かれた」(『希望への光』1606 ページ、『各時代の犬争闘』上巻 31 ページ)。

一方、「女」(教会)は荒れ野へ逃げ込みました(黙 12:6)。彼女には鷲のような翼が二つあると、記されています。これは、助けの得られる場所に飛び去る様子の描写です。女は荒れ野で養われ、蛇、つまりサタンは、彼女のところへ行けません(同 12:14)。神は、大きな迫害の間でさえ、常に残りの民を保護してこられましたが、終末時代にも同様になさるでしょう。

終わりの時の危機との関連で、キリストは御自分の民に、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタ 28:20)とおっしゃいました。キリストに従う者たちが大勢殉教の死を遂げたにもかかわらず、私たちはこのすばらしい約束を、いかに理解したらよいのでしょうか(ロマ 8:31～39、マタ 10:28 参照)。

いかなるもの(迫害、飢え、死)も、私たちを神の愛から引き離すことはできません。現在であれ、終末時代であれ、キリストが私たちとともにおられるというのは、痛み、苦しみ、試練、あるいは死が私たちを襲わないという意味ではありません。この世の人生において、私たちはそのような適用の除外を約束されていないのです。その意味は、イエスと、イエスが私たちのために成し遂げてくださったことによって、私たちが希望と約束を持って生きられるということです。その希望と約束とは、神がこのような試練の中でもともにいてくださるというもの、また私たちには新しい天と地における永遠の命が約束されているというものです。地上でどのようなことを経験しようと、私たちはパウロのように、「今や、義の栄冠を受けるばかりです。正しい審判者である主が、かの日にそれをわたしに授けてくださるのです。しかし、わたしだけでなく、主が来られるのをひたすら待ち望む人には、だれにでも授けてくださいます」(Ⅱテモ 4:8)と確信していられるという希望を持って生きることができます。「主が来られるのをひたすら待ち望む」私たちは、このような希望と約束を自分のものとして要求できるのです。

セブンスデー・アドベンチストという名前には、私たちが支持することの多くが含まれています。「セブンスデー」という部分は第七日安息日をあらわし、それは、私たちが十戒のその一つの掟だけでなく、十の掟すべてを信じているということを暗に指し示しています。「アドベンチスト」の部分は、私たちがイエスの再臨、つまりイエスが初臨の際に贖いの死によって成し遂げてくださったことのゆえにのみ存在しうる真理を信じていることを指し示しています。このようにセブンスデー・アドベンチストという私たちの名前は、非常に重要で分かちがたい現代の真理の二つの構成要素（律法と福音）を示しているのです。

問2 次の聖句は、律法と福音がいかに密接に結びついているかを、どのように示していますか。

エレミヤ 44 : 23 _____

ローマ 3 : 20 ~ 26 _____

ローマ 7 : 7 _____

福音とは良い知らせです。すなわち、私たちは神の律法を破ることで罪を犯しましたが、キリストが私たちのために十字架で成し遂げてくださったことを信じることで、神の律法を破ったことに対する罪を赦されるという良い知らせです。また私たちには、その律法を十全かつ完全に守る力も与えられています。

ですから、終わりの時という背景の中で、大争闘が特に激しいときに、神の民がとても具体的に描かれているのも驚くに当たりません。

問3 黙示録 14 : 12 を読んでください。この聖句は、律法と福音のつながりをいかにあらわしていますか。

◆ 神の律法を守ることの正しさを信じる民として、私たちアドベンチストは、律法を守ることが律法主義ではなく、神を愛することや、神によって救われたことから自然に生じるものであると、いかに人々に示すことができますか。申命記 11 : 1 や I ヨハネ 5 : 3 などの聖句は、この点をいかに支持していますか。

黙示録 12:9～12 と『人類のあけぼの』上巻 第1章を読んでください。

「造られた者がすべて、神に対する愛の忠誠を了承しているうちは、神の造られた全宇宙に完全な調和があった。創造主のみこころをなすことが、天の軍勢の喜びであった。神の栄光を反映することと神への賛美が、彼らの楽しみであった。そして、彼らが神を最高に愛していた間は、互いの間の愛も信頼と無我の精神に満ちていた。そこには、天の調和を破るものは何1つなかった。しかし、この幸福な状態に変化が起こった。神が被造物にお与えになった自由を悪用したものがあつた。罪は、キリストの次に位し、最大の栄誉を神から受け……た者から始まった」(『希望への光』14 ページ、『人類のあけぼの』上巻 3、4 ページ)。

エレン・G・ホワイトの「愛の忠誠」という言葉に注目してください。この力強く意味深い言葉は、愛が忠誠や忠実さにつながるという事実を指し示しています。自分の伴侶を愛する者は、忠誠によって愛をあらわすでしょう。それが、これらの天の被造物にとっての方法でしたし、神との関係における現在の私たちにとっての方法でもあるべきです。

話し合いのための質問

- ❶ サタンの存在だけでなく、大争闘における彼の役割をも指摘する聖書の証拠には、どのようなものがありますか。サタンが人の心の中の単なる悪の象徴ではなく、人格的な存在であることを人々に理解させるうえで、私たちはいかに手助けできるでしょうか。
- ❷ 私たちアドベンチストは、聖書の真理に関して、信じがたいほど多くの知識によって祝福されてきました。しかし、その知識はすばらしいのですが、なぜ私たちを救うには十分でないのですか。単に頭で知ること以上に、私たちは何を必要としていますか。
- ❸ 「愛の忠誠」という言葉について、安息日学校のクラスでもっと話し合ってください。この考えは、律法と恵み、信仰と服従の関係をよりよく理解するうえで、いかに助けとなりますか。この考えは、本来の愛という概念に内在する自由について、何を教えていますか。私たちはどのように「愛の忠誠」を示すことができますか。



ダニエルと終末時代

暗唱 聖句

「王はダニエルに言った。『あなたがこの秘密を明かすことができたからには、あなたたちの神はまことに神々の神、すべての王の主、秘密を明かす方にちがいない』」

(ダニエル 2：47、新共同訳)

「そして王はダニエルに答えて言った、『あなたがこの秘密をあらわすことができたのを見ると、まことに、あなたがたの神は神々の神、王たちの主であって、秘密をあらわされるかただ』」

(ダニエル 2：47、口語訳)

今週の 聖句

ルカ 16：10、ダニエル 1章、2章、3：1～6、黙示録 13：11～15、
ダニエル 3：13～18、ヨハネ 3：7、ダニエル 4章、6章

安息日 午後 4/7

今週のテーマ

主は古代イスラエルのためにすばらしい計画を持っておられました。「あなたたちは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる」(出 19：6)。この聖なる国民、この祭司の王国は、ヤハウェが唯一の神であることをこの世に伝える証人になるはずでした(イザ 43：10、12)。しかし残念なことに、この民は神から与えられた聖なる召しに応えなかったのです。最終的には、捕囚としてバビロンへ連れ去れることにさえなりました。

大変興味深いことに、捕囚という災難にもかかわらず、神は個々のユダヤ人を御自分のあかし人として用いることがおできになりました。言い換えれば、神はダニエルと彼の3人の友だちによって、イスラエルやユダによって果たせなかったことを、ある程度まで実現なさろうとしたのです。ある意味で、この人たちは、一つの民としてのイスラエルがなるべきだった、あるいはなすべきだったことの実例でした。

確かに、彼らの物語は、終わりの時から遠く離れた時代と場所で繰り広げられています。しかしそれでも、この人たちの中に私たちの模範となる特徴や特性を見いだすことができます。私たちは、バビロンの王宮のその異邦人たちのように、神を知らない世界に神をあかししなさいと召されるとともに、終末時代に生きているからです。私たちは彼らの物語から何を学べるでしょうか。

「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である」(ルカ16:10)。

イエスのこの言葉に目を向けてください。妥協すること、「ごく小さな事に不忠実」になることは、実に簡単です。問題は、「ごく小さな事」それ自体が重要だということではありません。そうではありません。だから、「ごく小さな事」なのです。私たちのほとんどが自分の体験やほかの人の実例から（あるいは、その両方から）知っているように、問題は、最初の妥協が次の妥協につながり、次の妥協はさらに次の妥協につながり、やがて私たちが「大きな事にも不忠実」になってしまうことです。

このような考えを念頭に置きつつ、ダニエル1章の物語を取り上げます。それは、バビロンで捕囚となった4人のユダヤ人青年の最初の体験談です。

ダニエル1章を読んでください。ダニエル、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤの取った立場は、古代イスラエルが諸国の民に対して示すべきだった姿を、反映していました（申4:6～8、ゼカ8:23も参照）。聖書の記事は、彼らが食べたものと、彼らが「知恵と理解力」（ダニ1:20）においてだれよりも「十倍も優れていた」（同）ことを直接結びつけてはいませんが、そこには明らかにつながりがあります。またこの章は、神が彼らに知識と知恵をお与えになった、とも述べています。つまり、バビロンの汚れた食べ物を拒否することで彼らが主に忠実であったので、主は彼らとともに働くことがおできになったということです。青年たちは服従し、神は彼らの服従を祝福なさいました。この4人の青年たちのように、もし古代イスラエルが全体として聖書の教えに勤勉かつ忠実に従っていたなら、神はこれと同じことをイスラエルにもなさらなかったでしょうか。もちろん、そうされたはずです。そして、もし私たちが忠実であるなら、今日、終わりの時にいる私たちにも、神はそうしてくださるでしょう。

◆ 私たちは教会として、多くの光と真理を与えられてきたので、「私たちは、自分たちに与えられてきたものに対して忠実、従順であつたらうか」と自問する必要があります。同時に、私たちは個々に、神のための力強いあかし人になれる立場をいかに取ることができるでしょうか。

ダニエル 2 章は、世界中で何千年にもわたって、無数の人々が聖書の神を信じるようになる手助けをしてきました。この章は、神の存在だけでなく、神の予知をも裏づける非常に合理的な証拠を提供しています。まさにこの章は、神の予知が神の実在の証拠であるということの啓示なのです。

問1 ダニエル 2 章を読んでください。この章は、神の存在を裏づけるそのような確証をいかに提供していますか。また、この書に描かれたとおりの今日のヨーロッパに目を向けてください（ダニ 2：40～43）。およそ 2600 年前に生きていた人間が、神の啓示以外のものによって、その状況をこれほど正確に述べることができたでしょうか。

ダニエルは、公然と恥じることなく、自分に啓示されたことのゆえに神をほめたえしました。ダニエルは、王の夢を知るだけでなく、それを解釈する能力の源として、すでに認められていた彼の知恵と理解力をいとも簡単に自慢したことでしょう。しかし、彼ははるかに分別がありました。彼と仲間がささげた祈りは（ダニ 2：17～23）、彼らが全面的に神に頼っていたことを示しています。さもなければ、彼らはほかの賢者たちと一緒に死んでいたでしょう。

のちにダニエルは、雇われ知者、祈祷師、占い師が王の夢を言い当てられなかったことを王に思い出させています。それとは対照的に、天の神は、唯一の真の神であられるがゆえに、秘密を明らかにすることがおできになるのです。

このように、謙遜と神に頼ることによって、ダニエルは力強い証人になることができました。当時、ダニエルが謙遜を示したのなら、今日、私たちはどれほどもっと謙遜を示すべきでしょうか。何しろ私たちには、ダニエルが知りえなかった救済計画の啓示があるからです。もし私たちを謙遜にさせ続けるものがあるとしたら、それは、イエスが十字架で成し遂げてくださったことに関する知識です。

◆ 私たちは謙遜について、キリストの十字架から何を学ぶべきですか。十字架は、私たちの罪深さだけでなく、私たちが救いに関して神にまったく依存していることについても、どんなことを教えていますか。もし十字架がなければ、あなたはどうかと思いますか。十字架以外に、あなたは何を誇るべきですか（ガラ 6：14 参照）。

聖書を学ぶ者たちは、ダニエル 3 章と黙示録 13 章の間につながりがあることを昔から気づいていました。前者は、ドラの平野における 3 人のヘブライ人の物語であり、後者は、神の民が過去において遭遇し、また終わりの時に遭遇するであろう迫害を描いています。

ダニエル 3:1～6 と黙示録 13:11～15 を読み比べると共通点があります。いずれの場合も、礼拝の問題が中心ですが、両方とも強制された礼拝について述べています。つまり、主導権を握る政治的勢力が、主にのみささげられるべき礼拝を強要するのです。

問 2 ダニエル 3:13～18 を読んでください。私たちが終わりの時に何に遭遇するかということだけでなく、いかにそれらに立ち向かうべきかということも理解するうえで助けとなるこの物語から、私たちは何を学べるのでしょうか。

地上最強の指導者であったネブカドネツアルは、この 3 人と彼らの神をあざけて、「お前たちをわたしの手から救い出す神があるか」（ダニ 3:15）と言いました。しかし彼は、神がどのようなお方であるのかを、間もなく自分で気づかざるをえませんでした。というのも、のちにこう宣言しているからです。「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの神をたたえよ。彼らは王の命令に背き、体を犠牲にしても自分の神に依り頼み、自分の神以外にはいかなる神にも仕えず、拝もうとしなかったので、この僕たちを、神は御使いを送って救われた」（同 3:28）。

間違いなく、王はこのような奇跡を見たあと、3 人が仕える神には何か特別なところがあると確信したのです。

しかし、これらの青年たちが炎の中から救い出されなかったとしたらどうでしょうか。彼らが自覚したことは、十分にありうることでした（ダニ 3:18）。王の命令に逆らうことが焼き殺されることを意味するとしても、なぜ彼らは逆らうことで正しい行動をしたのでしょうか。この物語は、結果にかかわらず、自ら信じることを支持する彼らの信仰と意志を力強くあかしています。

◆ 終わりの時に礼拝の問題が起るとき、私たちはどうしたら彼らのように忠実に立つことができるのでしょうか。もし私たちが今、「ごく小さな事」に忠実でないなら、終末の危機のような大きな出来事の中で忠実でいられると、どうして思えるのでしょうか。

ダニエル3章は、ネブカドネツアルが真の神の存在と力を認めたところで終わっています。しかし、神と神の力を知ることは、救いのために不可欠だとイエスが言われた生まれ変わりの経験（ヨハ3:7参照）をすることと同じではありません。確かに、ダニエル4:30に描かれている人は、回心した魂とは程遠いものでした（ヨハ15:5、使徒17:28、ダニ5:23も参照）。

しかしこの章が終わるまでに、ネブカドネツアルは、たとえつらい経験であったとしても、あらゆる真の力は神の内にあり、神なくして自分は何者でもない、と知りました。

「かつての高慢な王は、謙遜な神の子となった。暴君的で専制的な王が、賢明で恵み深い王になった。天の神に反抗して神をののしった王が、今はいと高き神の力を認めた。そして熱心に主を恐れて、国民の幸福を追求するようになったのである。ネブカデネザルは、王の王、主の主であられる神の譴責を受けて、ついにすべての王が学ばなければならない教訓を学んだ。それは、真に偉大であるということは、真にいつくしみ深くあるということである。彼は主が生ける神であることを認めて、『そこでわれネブカデネザルは今、天の王をほめたたえ、かつあがめてまつ。そのみわざはことごとく真実で、その道は正しく高ぶり歩む者を低くされる』と言った」（『希望への光』581ページ、『国と指導者』下巻128、129ページ）。

問3 ダニエル4:32（口語訳4:35）を読んでください。ネブカドネツアルは、神に関するどのような真理をここで表明していますか。

ダニエル4章は、1人の異教徒が「ユダヤ人の」神の権威、支配、力を認めるところで終わっています。ある意味で、この場面は初代教会で起こったこととの先触れでした。初代教会は、ユダヤ人のあかしと神の力によって、異邦人が主に関する真理を知り、その真理をこの世に宣べ伝え始めたからです。

◆ ヨハネ3:7を読んでください。私たちは終末の諸事件を、死の法令、礼拝、迫害といった点から考えますが、イエスは何よりも優先して、人々を時の終わりに備えさせるどのようなことをここで述べていますか。

問4 ダニエル6章を読み、次の質問に答えてください。

①ダニエル6：5、6（口語訳6：4、5）は、ダニエルの品性について、どのようなことを明らかにしていますか。私たちがいかに見られるべきかということに関して、これらの聖句からどのような教訓を得ることができますか。

②黙示録に描かれている終末の諸事件と結びつくどのような共通点を、この章の中に見いだすことができますか（黙13：4、8、11～17参照）。

③この状況におけるダニエルの立場になって考えてください。祈らないために、彼はどのような言い訳や論拠を用いることができたでしょうか。言い換えれば、彼は祈らないことをどのように正当化し、獅子の洞窟に投げ込まれるという厳しい試練を避けることができたでしょうか。

④ダニエルは必ずしも祈る必要がなかったにもかかわらず、なぜいつものように祈り続けたのだと、あなたは思いますか。

⑤ダレイオス王は、ダニエルが獅子の洞窟に投げ込まれる前にもかかわらず、ダニエルの信じる神の力について多少知っていました。それに関して、王は何と言いましたか（ダニ6：17〔口語訳6：16〕）。ダニエルは、自分が信じ、仕える神について、王にあかしをしていました。王のどの言葉が、そのことを証明していますか。

「この世界の歴史の終末が近づくにつれて、ダニエルが記した預言はわれわれが住んでいる時代そのものに関するものであるから、特別に注意を払わなければならない。それとともに、新約聖書の最後の書の教えを結びつけなければならない。サタンは、ダニエル書とヨハネが書いた黙示録の預言的部分は、理解することができないと多くの人々に思い込ませている。しかし、これらの預言を研究する者には特別の祝福が与えられると、明らかに約束されているのである。終わりの時に封が開かれるダニエルの預言に関して、『賢い者は悟るでしょう』と語られたのである（同12:10）。そして各時代にわたる神の民の指針として、キリストがそのしもべヨハネにお与えになった啓示については、『この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである』との約束が与えられているのである（黙示録1:3）」（『希望への光』591ページ、『国と指導者』下巻156、157ページ）。

私たちはダニエル書を、国々の盛衰、裁き（ダニ7:22、26、8:14）、悩みの時における神の民の解放（同12:1）との関連で考えがちですが、今週見たように、ダニエル書は私たちに、試練と迫害がいつ襲ってくるにしても、それらに対して個人個人が備えるとはどういうことかの実例も示しています。その意味において、これらの物語は終わりの時の極めて重要なメッセージを私たちに伝えているのです。詰まるところ、「獣の刻印」や「悩みの時」やこれから起きる迫害について知ることがいかに役立つとしても、もし私たちが必要とする神との体験を経ているのなら、このような知識はみな、私たちを罪に定めるだけでしょう。何よりも私たちに必要なのは、ダニエルや（ネブカドネツアルを含む）ほかの人たちが体験した「新たに生まれること」なのです。

話し合いのための質問

- ① ダニエル9:3～19のダニエルの祈りを読んでください。この祈りは、ダニエルが恵みと、神が私たちを愛し、（私たちの側のいかなる功績や善意ではなく）神御自身の深い憐れみのゆえに私たちを救ってくださることを理解していたことを示しています。なぜこれは、理解するだけでなく、経験すべき重要な真理なのですか。
- ② 「新たに生まれる」とは、どういうことでしょうか。いったいなぜ、「あなたがたは新たに生まれなければならない」（ヨハ3:7）と、イエスはおっしゃるのでしょうか。



イエスとヨハネの黙示録

暗唱 聖句

「勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じように」
(黙示録 3：21、新共同訳)

「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である」
(黙示録 3：21、口語訳)

今週の 聖句

Iコリ 10：1～11、黙示録 12：1～17、19：11～15、
エフェソ 1：20、黙示録 11：19、1：10～18

安息日 午後 4/14

今週のテーマ

新約聖書をざっと読んだだけでも、一つの重要な真実がわかります。新約聖書が旧約聖書と密接に結びついているということです。福音書も書簡も、再三再四、旧約聖書の出来事に言及したり、直接的あるいは間接的に旧約聖書から引用したりしています。そしてイエスは、御自身や御自分の働きに言及するとき、どれほどしばしば、「聖書の言葉」は「実現する」必要がある、と語られたことでしょう（マタ 26：54、56、マコ 14：49、ヨハ 13：18、17：12 参照）。

同じことが、ヨハネの黙示録についても言えます。確かに、旧約聖書、とりわけダニエル書を抜きにして、黙示録の意味を理解することは、ほぼ不可能です。私たちがしばしばダニエル書とヨハネの黙示録の両方を一緒に研究するのは、このことが一つの理由です。

黙示録における旧約聖書からの引用箇所極めて重要な側面は、同書のほかの部分と合わせて考えるなら、それらがイエスを明らかにしていることです。黙示録は、イエスがどのようなお方であり、御自分の民のために何を成し遂げ、時の終わりに私たちのために何をなさってくださいるかということに関する書、つまりイエスに関する書なのです。必然的に、終末の諸事件に焦点を合わせるときはいつでも、ヨハネの黙示録がそうしているように、イエスを常に中心に置く必要があります。今週の研究では、ヨハネの黙示録の中のイエスに目を向けます。

ダニエル書と黙示録が共有する多くのことの中に、二つの基本的な部分、つまり歴史的部分と終末論的（終末の諸事件に関する）部分があります。これら二つの概念は、それぞれの書の中で複雑に結びついています。私たちは歴史的な事件を、たとえそれらが小規模であるとしても、終わりの時の大規模、地球規模の事件の先触れや前例と見なすことができます。つまり、旧約聖書時代の出来事を学ぶことによって、私たちは現代以降に起きる出来事への洞察を得られるということです。しかし、この原則はダニエル書と黙示録に限定されるものではありません。

Iコリント 10:1～11 を読んでください。上記の原則が見られます。先週の研究で触れたように、ダニエル書のいくつかの物語（ダニ 3:6、15、27、6:6～9、21、22）は、地域が限定された歴史的な事件であったものの、幾分、黙示録に描かれた終末時代の事件を反映しています。私たちはこれらの物語を研究することによって、少なくともより大きな規模で、神の民が最後に遭遇するであろう事柄のいくつかを垣間見、それに対する洞察を得ることができるのです。しかし、おそらく最も重要な点は、地上での私たちの目の前の状況にかかわらず、私たちが最終的な救いを確信していることでしょう。黙示録がほかにもどのようなことを教えていると、それは忠実な者たちに勝利を保証しています。

いくつかの例外はあるものの、黙示録の1章から11章までは歴史的な部分で、それに続く13章から22章は終末時代に関する部分です。

問1 黙示録 12:1～17 を読んでください。私たちはこの章を、歴史的な部分と終末の諸事件のどちらと判断すべきですか。なぜそう考えるのですか。

おわかりいただけるように、この章は両方の部分に属しています。なぜそう考えるのでしょうか。歴史的な対立——天からのサタンを追放（黙 12:7～9）、赤子のイエスに対するサタンの攻撃（同 12:4）、その後の教会史における教会への迫害（同 12:14～16）——について語られたあとに、終末時代の残りの民に対する悪魔の攻撃（同 12:17）についての描写が続いているからです。

◆ 歴史から学ぶ教訓の一つは、人間が決して歴史から学ばないということである、と言われてきました。どの時代に生きていようと、人間は同じ過ちを繰り返すという意味です。私たちには過ぎ去った多くの歴史がありますが、それらによって、私たちは同じ過ちを犯すことをいかに避けることができますか。

問2 さまざまなイエスの名前を含んでいる次の聖句を読んでください。その名前は、ある場合にはイエスの描写であり、イエスがなされたこと、なさっておられること、なさるであろうことの説明です。これらの聖句は、イエスについてどのようなことを教えていますか。

黙示録 1 : 5 _____

黙示録 1 : 18 _____

黙示録 5 : 8 _____

黙示録 19 : 11 ~ 15 _____

黙示録 21 : 6 _____

これらは、さまざまな役割や機能によってイエスを描写した黙示録の多くの聖句の中のいくつかにすぎません。イエスは小羊であり、それは、私たちの罪のための犠牲として御自身をささげられた初臨を指し示しています。「いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。現に、あなたがたはパン種の入っていない者なのです。キリストが、わたしたちの過越の小羊として^{ほふ}屠られたからです」(Iコリ 5:7)。イエスはまた、「死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者」(黙 1:18、口語訳)でもあり、これは彼の死と、死者の中からの復活を明確に述べています。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する』」(ルカ 24:46)。さらに黙示録 19:11 ~ 15 では、力と栄光と正義に満ちて地球に戻って来られる再臨の際の役割によって、イエスは描かれています。「人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである」(マタ 16:27)。

◆ 私たちは、イエスの生涯、死、復活、再臨を、日々どうしたら自分の存在の中心、道徳的選択の基礎にすることができるようになるのでしょうか。

二つの主要な部分〔歴史的部分と終末論的部分〕に加えて、黙示録には、ユダヤ人の聖所を中心に築かれたもう一つの構造的層があります。この聖所という〔繰り返し登場する〕モチーフは、二つの主要な部分のどちらかに限定されるものではなく、両方にまたがっています。

地上の聖所において、そのモチーフの一つは中庭の焼き尽くすさげ物の祭壇で、つまり動物が殺された場所で始まります。キリストの十字架を象徴する動物の死のあと、祭司は聖所の第一の部屋に入りましたが、それは、イエスが昇天後に天の聖所でなされたことのひな型でした。これは、イエスが燭台の間を歩かれたことによってあらわされています（黙1:13）。

問3 黙示録4:1、2を読んでください。「開かれた門」は何をあらわしていますか。この場面は、どこでのものですか（使徒2:33、5:31、エフェ1:20、ヘブ10:12、13、詩編110:1、黙12:5も参照）。

キリストは昇天後すぐに、この最初の開かれた門を通して入り、天の神殿の聖所〔第一の部屋〕で祭司の働きを始められました。キリストが黙示録の中で最初に登場されるとき、彼は地上の聖所の第一の部屋の燭台の前に立っておられます（黙1:10～18参照）。

問4 黙示録11:19を読んでください。天の聖所が開かれ、地上の聖所の第二の部屋に置かれていた神の契約の箱をヨハネが目にしたという事実は、どのような意味がありますか（レビ16:12～14参照）。

天の聖所における契約の箱という象徴は、疑いの余地なく、至聖所、つまり天の聖所の第二の部屋への言及です。私たちはヨハネの黙示録の中に、二つの部屋におけるイエスの奉仕だけでなく、天の出来事と地上の出来事がつながっているという極めて重要で慰めとなる事実も見ることができます。黙示録に描かれている歴史上の試練や終わりの時の試練のただ中にあっても、「全天は主の備えの日の人々を立たせる備えをする働きに従事している。天と地のつながりは、非常に密接であるようだ」（エレン・G・ホワイト『きょうを生きる』307ページ、英文）という確信を、私たちは持つことができるのです。

黙示録におけるあらゆることは、構造から内容に至るまで、一つの目的を持っています。それはイエス・キリストをあらわすことです。

そういうわけで、この書の冒頭の言葉は、「イエス・キリストの黙示」（アポカリュプシス・イエスー・キリストウー）となっています。これは通常、①「イエス・キリストからの啓示」、または②「イエス・キリストに関する啓示」（黙1：2）と理解されます。それが「啓示」（あらわし示すこと）であるという事実が、黙示録は難しすぎて理解できないと思っている人たちへの反論です。もし主が、読者たちによって黙示録が理解されないことを意図されたのなら、なぜこの書を聖書にお入れになったのでしょうか。

黙示録1：1～8を読んでください。黙示録において、イエスは「地上の王たちの支配者」（黙1：5）と紹介されており、この書の終わり近くでは、「王の王」（同19：16）と評されています。ここでのすばらしい知らせは、地上のあらゆる混沌や混乱のただ中にあっても、私たちの愛情深い主なる救い主が最終的権限を有しておられるという確信を、私たちが持っているということです。

黙示録1：5では、キリストが^{あがな}贖い主であるとはっきり述べられています。「わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放してくださった方に」という言葉は、十字架におけるキリストの贖いの死を指し示しています。彼は私たちが義とするだけでなく、聖なる者にもしてくださったのです（Iコリ6：11）。このような聖句の中に、私たちは救いの確証を見いだすことができます。なぜならそれは、イエスが私たちの罪を洗い流す唯一のお方であることを示しているからです。私たちはそれを自分の力では決してできません。

問5 黙示録1：7を読んでください。イエスについて何を教えていますか。

キリスト教信仰全体の中核を成すのは、キリストが「雲に乗って」戻って来られるという約束です。イエスは再びおいでになります。全世界が目撃する出来事として、文字どおりに戻られます。それは、この世の苦しみ、混乱、荒廃を最終的に終わらせ、あらゆる永遠の約束の到来を告げる出来事です。

◆ 黙示録1：8は私たちに、イエスについてどのようなことを教えていますか。私たちはこの聖句の中に、私たちが直面しているいかなる試練の中にあっても慰めを得ることのできる、どんな希望を見いだすことができますか。

黙示録1:10～18を読んでください。この聖句に登場されるイエスは、天の聖所の第一の部屋に立っておられます。この役割におけるイエスの啓示がとても圧倒的なものだったので、ヨハネは恐れて彼の足もとに倒れてしまいました。いつも元気づけてくださるイエスは、「恐れるな」とヨハネに言い、御自身のことをアルファにしてオメガ、最初の者にして最後の者と（つまり、神として永遠に存在することを）指摘しておられます。のちにイエスは、御自分の死、復活、その復活がもたらす希望について語られます。イエスは「死と陰府」の鍵を持っておられます。言い換えれば、イエスはここで、ラザロが亡くなったときにマルタに言われたことをヨハネに言っておられるのです。それはヨハネも記録している言葉です。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」（ヨハ11:25、26）。

かつてマルタを、今やヨハネを相手に、イエスは復活という希望、キリスト教信仰の頂点、絶頂を指し示しておられます。この希望なくして、どこに希望があるでしょうか。

問6 黙示録22:7、12、13を読んでください。イエスについてどのようなことを明らかにしていますか。

「キリスト・イエスはアルファであり、オメガである。旧約聖書の創世記であり、新約聖書の黙示録である。両者はキリストにおいて出会う。サタンの誘惑に勝利し、アダムの恥ずべき失敗と墮落を贖う働きを成し遂げられた第二のアダムの服従によって、アダムと神は和解するのである」（『SDA聖書注解』第6巻1092ページ、英文）。確かに、イエスは初めであり、終わりです。彼は私たちを初めに創造し、私たちを終わりに再創造してくさるでしょう。

最初から最後まで、ヨハネの黙示録は、歴史だけでなく、終末の諸事件を私たちに教えてるように、「イエス・キリストの黙示」（アポカリュプシス・イエス・キリストゥー）です。改めて言いますが、私たちが終末の諸事件についてどのようなことをほかに学ぼうと、イエス・キリストがそれらすべての中心でなければなりません。

◆ 私たちはどうすれば、日々、イエスを生活の中心にできるでしょうか。

「黙示録には神の奥義が描かれている。その靈感による書に与えられている名、まさしく『黙示録』は、これが封じられた書であるという供述とは矛盾している。黙示とは、何か表されたもののことである。主ご自身がこの書に含まれている奥義を、そのしもべに表された。そして主は、その奥義がすべての人々に公開されて研究されるようにと意図されている。その真理は、ヨハネの時代に生きていた人々と同様に、この地上歴史の最後の時代に住む人々にもあてられている。この預言に描かれている場面のあるものは過去に起こったものであり、あるものは今起こりつつある。またあるものはやみの権力と天の君との大争闘の終結を見させ、またあるものは新しくされた地に住むあがなわれた者たちの勝利と喜びを表している」（『希望への光』1578、1579 ページ、『患難から栄光へ』下巻 288 ページ）。

私たちが今週見た聖句は、黙示録の初めのほうのものであれ、終わりのほうのものであれ、この書がどれほどイエスに関するものであるかを示しています。歴史的事件に関する旧約聖書の言及でさえ、それらをみな用いて、ヨハネの黙示録は主イエスについてさらに教えています。黙示録の中で、イエスに関する聖句をもっと見つけようと思うなら、黙示録 3:14、5:5、6、7:14、19:11～16 も参照してください。このような聖句をまとめるとき、私たちはイエスをはっきり知り、彼の弟子であると自称する自分たちにとって、彼がどのような存在であるかがわかります。

話し合いのための質問

- ① 新約聖書の至る所で、繰り返し旧約聖書に言及しているという事実は、私たちにとってどのような意味がありますか。私たちはこのことから、いかに聖書が信仰の中心であるということ、またどれほど真剣に神の言葉を受け取る必要があるということについて、何を学ぶことができますか。私たちの私生活や教会生活において聖書の権威を低下させるありとあらゆる企てから、私たちはいかに自分の身を守ることができますか。
- ② 黙示録をざっと読んで、イエスについて具体的に述べているほかの聖句をできるだけたくさん集めてください。安息日学校のクラスで、その聖句を声に出して読みましょう。それらは、私たちの主の性質、働き、力、品性について、何かほかに明らかにしていますか。これらの聖句が明らかにしていることから、あなたはどのような慰めを得ますか。
- ③ 死の世界にあって、私たちは死者の復活の約束の中に、どうしたら希望と慰めを見いだすことができるようになるのでしょうか。



救いの計画と終末時代

暗唱 聖句

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(Ⅰヨハネ 4:10、新共同訳)

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある」

(Ⅰヨハネ 4:10、口語訳)

今週の 聖句

ヨハネ 14:9、ゼファニヤ 3:17、ヨハネ 1:1～3、ローマ 8:38、39、詩編 91:15、16、黙示録 14:6、7、エフェソ 1:4、5

安息日 午後 4/21

今週のテーマ

キリスト教とそれ以外の宗教との間には、興味深いが決定的な一つの違いがあります。後者は、創始者が信徒に教えたことを強調するものの、創始者が**信徒のためにしたことは強調しない**という点です。なぜなら、創始者たちが信徒のために何をしたにせよ、それは彼らを救うことができないからです。このような指導者たちにできたのは、いかに自分自身を「救う」かを人々に教えようとするだけでした。

それとは対照的に、クリスチャンは、イエスが教えられたことだけでなく、イエスがなされたことも強調します。なぜなら、キリストのなされたことが、私たちの唯一の救済手段を提供したからです。キリストの受肉(ロマ 8:3)、十字架での死(同 5:8)、復活(Ⅰペト 1:3)、天での奉仕(ヘブ 7:25)——これらの行為だけが、私たちを救うものなのです。それらは、いずれも私たち自身の中にはありません。「たとえ人間の内の良いもの、神聖なもの、高潔なもの、愛すべきものをすべてかき集め、それらを人間の魂の救いや功績の役割を果たすものとして神の御使いたちに差しだしても、その申し出は背信として拒まれるでしょう」(エレン・G・ホワイト『信仰と行い』24 ページ、一部改訳)。このすばらしい真理は、終わりの時の危機と惑わしのただ中にいる私たちにとってとりわけ重要です。

十字架を間近に控えて、イエスは仲間内の者たちに、人はどうすればイエスを通して父なる神に近づくことができるのか、ということについて話されました。それは、フィリポが、「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」(ヨハ14:8)と言ったときのことです。そのとき、イエスはフィリポに、父なる神について答えられました(ヨハ14:9)。イエスの答えにより、神に関する誤解が解消されました。

憐れみ、恵み、赦しにあふれた新約聖書の神と比べて、旧約聖書の神は正義の神だと、ある人たちは言います。彼らは両者を区別しますが、その区別は妥当ではありません。旧約聖書の神も新約聖書の神も同じ神であり、同じ特徴を持っておられるのです。

キリストがこの世に来られた一つの理由は、父なる神に関する真実を明らかにすることでした。何世紀にもわたって、父なる神とその御品性に関する誤った考えが、異教徒の間だけでなく、神が選ばれた民の間にも広まっていました。「神を曲解したために、この地上は暗くなった。暗黒の影を照し、世の人々を神に呼びもどすためには、サタンの欺瞞的な力をうち破らねばならなかった」(『希望への光』676 ページ、『各時代の希望』上巻4ページ)。

神は変わりません。もし私たちが旧約聖書における諸事件にまつわる事実をすべて知るなら、神が新約聖書におけると同様、旧約聖書においても憐れみ深いことに気づくでしょう。聖書は明言しています。「神は愛」(Iヨハ4:8)であり、不変であられる、と。「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です」(ヘブ13:8)。

十字架にかかれたのは旧約聖書の神であることも、覚えておってください。この神は、怒ること遅く、誠実で、憐れみ深く、恵み深く、愛にあふれる神でもあられます(出34:6、7)。神は常に変わらぬ愛を持ち(詩編143:8)、御自分に従う者たちを喜ばれます(同147:11)。神は人々を繁榮させ、彼らに希望を与えようと計画しておられます(エレ29:11)。愛のゆえに、神は御自分の民をもはや非難せず、喜びの歌をもって楽しまれます(ゼファ3:17)。これが、そしてそれ以上が、父なる神の真の姿です。

◆ イエスが父なる神をあらわしておられるという事実について考えてください。このことは、とりわけ、神を時折恐れる人たちにとって、なぜ素晴らしい、希望にあふれた真理なのか。

罪は神から人類を切り離しました。両者の間に深い亀裂が生じ、それが閉じられない限り、人間は永遠に滅びる運命にありました。その溝は深く、危険でした。罪の問題を解決し、罪深い人間と、義にして聖なる神とを和解させるには、まったく信じがたいほどのものが必要だったのです。それには、神御自身とともにおられる永遠のお方、神御自身のように神聖なるお方が人間となり、その人性において御自分を私たちの罪の犠牲としてささげる必要がありました。

ヨハネ 1:1～3、14 と フィリピ 2:5～8 を読むと、イエスがどのようなお方であるかが教えられています。キリストは永遠の存在であり、だれにも、何にも依存しておられませんでした。彼は神でした。単に神の外見をした者ではなく、神そのものであられたのです。キリストの根本的な性質は、神聖かつ永遠でした。イエスはそのような神性を保持しながらも、肉体において律法を守り、律法を破ったすべての者たち（私たち全員）の身代わりとして死ぬために人間にられました（ロマ 3:23）。

キリストは、ほかの人よりも何ら優位なところなく、人間にられました。彼は、内在する神の力によってではなく、だれもが入手可能な外在する神の力に頼ることで、神の律法を守られたのです。

イエスは完全に神であり、完全に人間でした。その意味するところは、「万物を御自分の力ある言葉によって支えておられ（る）」（ヘブ 1:3） お方と、「飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子」（ルカ 2:16）が同じだったということ。「すべてのものよりも先におられ、すべてのものは（彼）によって支えられてい（る）」（コロ 1:17） お方と、人間の子どもとして「知恵が増し、背丈も伸び（た）」（ルカ 2:52） お方が同じだったということ。「（これ）によらずに成ったものは何一つなかった」（ヨハ 1:3） お方と、「木につけて殺した」（使徒 5:30） お方が同じだったということです。

もしこれらすべてのことが、私たちに対するキリストの愛をあらわしており、私たちに対するキリストの愛が、私たちに対する神の愛のあらわれであるのなら、私たちが、喜び、感謝すべき理由をたくさん持っていることは、驚くに当たりません。

◆ ローマ 8:38、39 を読んでください。私たちはきょうの研究の中で読んだことから、パウロがここで言っていることを信じるための力強い理由を、いかに得ることができますか。

聖霊は、父なる神と同じくらいに、これまで誤解されてきました。神学者の中には、聖霊を父なる神と子なる神の間の愛のように考えてきた人もいます。言い換えれば、聖霊は両者の間の愛情にすぎないということです。これは、聖霊が父・子・聖霊の神を構成する二つの位格の間の関係性におとしめられ、一つの位格そのものでないことを意味します。

しかし、聖書は聖霊の人格を明確に示しています。クリスチャンは、父と子とともに聖霊の名によってバプテスマを受けます（マタ 28:19）。聖霊はキリストに栄光を与え（ヨハ 16:14）、人々の罪を明らかにし（同 16:8）、悲しまれます（エフェ 4:30）。彼は弁護者（ヨハ 14:16）、助け主、慰め主であり、教え（ルカ 12:12）、執り成し（ロマ 8:26）、聖なる者とします（Iペト 1:2）。キリストは、聖霊が人々をあらゆる真理へ導かれるといわれました（ヨハ 16:13）。要するに、聖霊は、父なる神や子なる神と同様に神であられるということです。ともに、三者は一つの神です。聖霊がなされるすべてのことは、神の愛をあらわしています。聖霊がなされることには、いろいろなことがあります（ルカ 12:12、ヨハ 16:8～13、使徒 13:2 参照）。

聖霊が神であられるという最大の証拠は、キリストの受肉です。イエスは聖霊によってお生まれになりました（マタ 1:20）。このような「創造」は、神にしかおできになりません。

聖霊は、キリストのために二つの対照的な奇跡を起こすことがおできになります。第一に聖霊は、全能者なるキリストをマリアの胎内に宿らせられました。キリストは人間の肉体のまま、その限られた肉体のまま昇天されました。第二に聖霊は、人性によって限定されたキリストをもたらし、別の説明しがたい奇跡によって、世界中のクリスチャンの前にその姿をあらわしてくださいます。

このように聖霊は、父なる神、子なる神とともに、私たちのために働いておられます。「三位一体の神の心は、人類に対する哀れみでかき立てられ、父、子、聖霊は、救済計画を立てることに没頭された」（エレン・G・ホワイト『健康に関する勧告』222 ページ、英文）。

父なる神、子なる神、聖霊は、私たちが等しく愛し、私たちを神の永遠の国へ救い入れるために働いておられます。そうであれば、私たちはこれほど素晴らしい救いを無視できるでしょうか。

◆ 父・子・聖霊なる神が私たちの永遠の幸福のために働いておられるという事実から、私たちはどれほど多くの慰めを得ることができるでしょうか。

アドベンチストの中には、自分は救われるのだろうか、と疑う人がいます。彼らは確信がなく、永遠の命に関して自分の未来を知りたいと思っています。彼らは自分の内面に、人生の旅において自分を励ますものがほとんどないのです。

私たちがイエスの御品性と自分の品性の間の大きな隔たりに目を向けたり、「命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない」（マタ7：14）といった聖句を読んだりするとき、私たちの内のだれが、自分は大丈夫だろうか、と危ぶむ瞬間を持たないでしょうか。

終末時代に備えるために、今、人々は救いの確信を持たねばなりません。彼らは、恐れずに未来と向き合うために、救いの現実を大いに喜ばねばなりません。しかしすでに触れたように、三位一体の神の、生けるすべての位格は、私たちを救うために働いておられます。それゆえ、私たちは自分の救いの確信をもって生きることができますし、そう生きるべきです。

問1 次の聖句を読んでください。救い、神が私たちのために成し遂げてくださったこと、約束などに関して、どのような希望と確信を得ることができますか。

詩編 91：15、16 _____

ヨエル 3：4、5（口語訳 2：31、32）_____

ヨハネ 10：28 _____

ローマ 10：9～13 _____

I ヨハネ 5：11～13 _____

私たちは聖^{きよ}い生活を送るようにと召され、また命じられてもいますが、このような生活は、救いを得る手段ではなく、キリストによって救われたことの結果です。私たちは死に至るまで忠実でなければなりません。終わりの時に、神の民は忠実で、従順であるところを見いだされるでしょう。その忠実さや従順さは、キリストが彼らのために成し遂げてくださったことへの確信から生じるものなのです。

「永遠の福音」について黙示録 14：6、7 を読んでください。福音はここで、「永遠の」と呼ばれています。これは、神が不変であられることのさらなる証拠です。不変の神は、不変の福音を持っておられます。この永遠の福音は、それを自ら進んで受け入れる者たちすべてに確信を与えます。その福音は、神の不変の愛を明らかにするものであり、この世に伝える必要があるのは、このメッセージです。だれもがそれを耳にする機会を必要としています。だから神は、それを広めるために御自分の民を召されたのです。

「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです」（エフェ 1：4、5）。この聖句はいかに福音が「永遠」であるかということについて、述べています。

「天地創造の前に、……キリストにおいてお選びになりました」。まさに「永遠の福音」とはこのことです！ この世界が創造される前でさえ、神の御計画は、私たちがキリストにおいて救いを得ることでした。

この聖句のいくつかの語句に目を向けてください——「お選びにな（った）」「神の子にしようと」「御心のままに」「前もってお定めになった」。神は、私たちが「キリストにおいて」永遠の命を得ることを強く願っておられます。これら二つの聖句が、その願いをどれほど示しているか、注目してください。そして、これらすべてを神が永遠の昔になさっていたという事実は（Ⅱテサ 2：13、Ⅱテモ 1：9 も参照）、神の恵みをはっきり指摘し、私たちの救いが私たちにできることや被造物のいかなる功績からもたらされるのではなく、まったく神の愛情深い御品性から生じる行為としてもたらされることを示しています。もし私たちが存在する前に、キリストにおいて救いを得るように私たちが選ばれたというのであれば、どうして私たちのできることによって救いをもたらされうのでしょうか。

そしてこの選びは、選ばれた者たちの生活の中で、いかに明らかにされるのでしょうか。「みまえにきよく傷のない者となる」（エペ 1：4、口語訳）ことによってです。私たちが選ばれたのは、そのためでもあるのです。

◆ 私たちは、キリストの再臨に先立つ終末時代のメッセージの一部として、「永遠の福音」をこの世に広めるよう召されています。それをほかの人に伝えることができるようになる前に、なぜ私たちは「永遠の福音」の現実を自分自身の生活の中で知り、体験する必要があるのですか。

私たちは救いの確信を得ることができますが、それに関して思い上がってはいけません。誤った救いの確信というようなものはないでしょうか。もちろん、あります。イエスもそれを注意するようと言っておられます。「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。かの日には、大勢の者がわたしに、『主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか』と言うであろう。そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ』」(マタ7:21～23)。

この人たちは致命的な間違いを犯しました。第一に、彼らは主の御名によってとても偉大なことをしたにもかかわらず、主の御心を行うこと、つまり主の律法に従うことをしていませんでした。イエスは、「罪ある者ども、失敗ある者ども、不完全な者ども、わたしから離れ去れ」とはおっしゃっていません。そうではなく、イエスは「不法を働く者ども」(ギリシア語の「アノミアン」〔無法])と彼らを評しておられるのです。第二に、彼らが自分自身や自分が成し遂げたことを強調している点に注目してください。「私たちはあなたの御名によってこれもそれもあれもしたではありませんか」と。神の前で自己弁護をしようとして自分の行いを指摘するとは、彼らはどれほどキリストから離れてしまっていたことでしょうか。私たちを救う唯一の業は、信仰によって私たちのものと認められるキリストの業だけです。私たちの確信を置くべきはここです。私たち自身や私たちの行いではなく、キリストが私たちのために成し遂げてくださったことです。あなたは確信を得たいと思いませんか。神の律法に従い、キリストの義の功績にのみ安んじてください。そうすれば、あなたは必要な確信をすべて得ることでしょう。

話し合いのための質問

- ① 伝えられるところによれば、マルティン・ルターはこう言ったそうです。「自分自身に目を向けるとき、私はどうすれば自分が救われうるのかわからない。しかし、イエスに目を向けるとき、私はどうすれば自分が滅ぶうるのかわからない」と。このような気持ちを常に持ち続けることは、なぜ良い考えなのか。
- ② 大争闘という筋書きの現実、父なる神、子なる神、聖霊が愛されるこの世の悪の現実によりよく対処するうえで、いかに助けとなりますか。



天の聖所におけるキリスト

暗唱 聖句

「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき」

(フィリピ 2: 9、10、新共同訳)

「それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ」

(ピリピ 2: 9、10、口語訳)

今週の 聖句

ローマ 8: 3、ヨハネ 1: 29、黙示録 5: 12、ヘブライ 7: 1～28、
ヘブライ 9: 11～15、レビ記 16: 13、ヘブライ 9: 20～23

安息日 午後 4/28

今週のテーマ

天の聖所におけるイエスについて、ヘブライ人への手紙には次のように記されています。「イエスは、わたしたちのために先駆者としてそこへ入って行き、永遠にメルキゼデクと同じような大祭司となられたのです」(ヘブ 6: 20)。聖書は、特に新約聖書は、天の聖所における大祭司としてのキリストの役割、つまりキリストがこの地上で犠牲としての働きを終えられたあとに担われた役割についてとても明快です(ヘブ 10: 12 参照)。

私たちは今週、天の聖所におけるキリストの働きを研究します。キリストの執り成しの働きは、御自分の民を終末に備えさせるために不可欠です。ですから、私たちには次のような重要な勧告が与えられています。「聖所と調査審判の問題は、神の民によってはっきりと理解されねばならない。すべての者は、自分たちの大なる大祭司キリストの立場と働きについて、自分で知っている必要がある。そうしなければ、この時代にあって必要な信仰を働かせることも、神が彼らのために計画しておられる立場を占めることもできなくなる」(『希望への光』1833、1834 ページ、『各時代の大争闘』下巻 222 ページ)。

天の聖所において、キリストは私たちのために何をしておられるのでしょうか。それを理解することは、とりわけ終わりの時において、なぜ重要なのでしょうか。

キリストという最高の犠牲について学ぶことは、信者を終末に備えさせるうえでとても役に立ちます。人間はしばしば、自分の前方にある目標に目を向けます。それは当然のことです。しかし、目標が自分の後ろにあると自覚することも良いことです。私たちはカルバリーのことを話しています。イエスが私たちのために達成された目標は、不可逆的、最終的なものであり、前にある目標をも確かなものにします。

問1 ローマ 8：3、I テモテ 1：17、6：16、I コリント 15：53 を読んでください。なぜ神は御子をこの世に送られたのですか。

神は、肉において罪を罪として処断するために、贖罪^{しょうざい}の供え物となるキリストを送られました。これは、どういう意味でしょうか。キリストは不死の存在として、死ぬことがおできになりませんでした。それゆえに主は、私たちの身代わりとして死ぬことができるように人間となり、死ぬべき性質をその身に帯びられました。

実際にイエスは神であられたにもかかわらず、「人間と同じ者になられ……へりくだって、……十字架の死に至るまで従順でした」（フィリ 2：7、8）。イエスが十字架で死んだとき、キリストの神聖は死にませんでした。それは神にしかわからないことです。人間の理解を超えた何らかの方法で、イエスの神性は母の胎内での9か月の間も、墓の中での数日の間も休止状態でしたし、イエスは地上における生涯や働きの中で、御自分の人性を支援するために決して神性をお用いになりませんでした。

ルカ 9：22 はキリストの死が計画的なものであったことを教えています。キリストは死ぬためにお生まれになりました。あざけられ、むち打たれ、殴られ、痛ましくも十字架にかけられることをまったく考えない時は、一瞬たりともなかったでしょう。これは比類なき愛、これまでに目撃されたことのない、十分に理解されえない愛です。

◆ 私たち人間はこのような愛を前にして、ひれ伏し、信仰と服従によって礼拝する以外に、何かできるでしょうか。十字架の現実、人間の功績の価値のなさについて、何を物語っていますか。

問2 ヨハネ 1：29、黙示録 5：12、13：8 を読んでください。これらの聖句が共有している一つの比喻は何ですか。私たちが救済計画を理解するのを助けるうえで、この比喻はいかに重要ですか。

バプテスマのヨハネがイエスを「神の小羊」と呼んだとき、彼は間違いなく聖所に言及していました。より直接的には、罪のためのキリストの死を、贖罪のささげ物として殺されてきたすべての小羊（とユダヤ人の聖所の儀式におけるほかのいけにえの動物たち）の唯一無二の完成だと、彼はみなしていたのです。確かに四福音書は、ほかにどのようなことを教えてしようと、突き詰めれば、この世の罪を取り除く神の小羊としての役割においてイエスがなされたことの物語を記しています。

しかし、イエスと、私たちの救いのための彼の働きに関する物語は、彼の死と復活をもってしても、福音書で終わっていません。ヘブライ人への手紙は冒頭から、犠牲の小羊としての働きに続く、天の聖所における大祭司としてのキリストという主題に触れています。十字架後のこの役割の彼に最初に言及してから（ヘブ 1：3）、あとに続くこの書のいくつかの章では、イエスを大祭司と呼んでいます。天の聖所における彼の働きは、ヘブライ 7 章に詳しく描写されています。

問3 ヘブライ 7 章を読んでください。イエスについて、著者はここでも何と言っていますか。

これらの聖句はとても意味深長ですが、そこで言われていることの要点は、イエス・キリストが、地上の聖所の奉仕におけるアロンの家系の祭司たちよりも優れた祭司職を持っておられるということです。しかし今や、地上の聖所における地上の祭司の代わりに、私たちには、天の聖所で私たちのために奉仕しておられる天の大祭司がおられます。それゆえ、今イエスに私たちの目を向けるなら、私たちは天の聖所における大祭司としての彼を見ることができるのです。

ヘブライ7:24～27、8:6を読んでください。これらの聖句の中には、すばらしい希望が与えられています。キリストは、ほかのいかなる祭司も持ちえなかったいくつかの資格のゆえに、完全に救うことがおできになります。キリストは神であり、神は罪を赦す権能を持っておられます。彼は変わることをない祭司職を持っておられます。キリストは、かつて病人をいやし、孤独な者を慰められた頃と同じ憐れみを持って、御自分の民のためにいつも執り成しておられます。彼は人間でもありますが、罪なく生まれ、罪のないまま過ごされました。そして罪なき者として、人間のあらゆる罪の信じがたい重圧を受けて亡くなされました。その結果、神にして人間である彼だけが、天の聖所で罪人の執り成しをおできになるのです。

先の聖句はまた、キリストの犠牲が一度限りのものであったことも示しています。それは一度だけ必要とされ、これまでに生きたすべての人に救いをもたらすのに十分でした。詰まるところ、どなたが十字架で亡くなったのかを考えれば、その犠牲がすべての人間にとって十分でないわけがありません。

ヘブライ9:11～15を読んでください。キリストは、御自分の死と天における現在の奉仕とによって、私たちのために贖いを成し遂げられました。ヘブライ9:12は、キリストが「永遠の贖いを成し遂げられた」と述べています。「贖い」と訳されているギリシア語は、「身請けすること」「解放」「救出」をも意味します。ルカ1:68で、「主はその民を訪れて解放（された）」とゼカリヤが宣言したときに用いられている言葉と同じ言葉です。キリストの血（唯一の完全な犠牲の血）への言及は、この贖い、この解放を成し遂げたのが、いけにえの小羊としてのキリストであられたことを意味します。そしてこの福音のすばらしいところは、キリストがこれを御自身のためではなく、私たちのために成し遂げられたということ、また、その贖いはキリストの犠牲を受け入れるすべての人にとって有効であるということです。

◆ キリストは私たちのために「永遠の贖いを成し遂げられた」ということ、これを成し遂げて初めて、彼が天の聖所での働きを私たちのために開始されたということについて、じっくり考えてみてください。このことは、キリストが天の聖所で私たちのためにしてくださっていることに関して、どのような希望を与えてくれますか。

罪は神と人間の間に恐ろしい分離をもたらしましたが、キリストの犠牲的な死によって、私たち人間は神のもとに導かれ、神に近づき続けることができます（1ペト3:18、エフェ2:18 参照）。

問4 「わたしたちが持っているこの希望は、魂にとって頼りになる、安定した^{いかり}錨のようなものであり、また、至聖所の垂れ幕の内側に入っていくものなのです。イエスは、わたしたちのために先駆者としてそこへ入って行き、永遠にメルキゼデクと同じような大祭司となられたのです」（ヘブ6:19、20）。これらの聖句によれば、イエスは私たちのためにどのようなことをなさったのですか。

キリストの働きについてヘブライ9:24を読んでください。イエスは先駆者であり、私たちの代表として天の聖所に入り、**私たちのために**神の御前にさえあらわれてくださいました。つまり、イエスは父なる神の前に立ち、御自分の贖罪の功績、つまり私たちのために「成し遂げられた」「永遠の贖い」を与えておられるのです。

確かに、私たちがイエスを受け入れたとき、私たちの罪は赦され、私たちは神の前に、赦され、清められて立ちました。しかし、私たちがクリスチャンになったあとでさえ、すばらしい勝利の約束にもかかわらず、依然として時折罪を犯すという事実は変わりません。そのような場合には、イエスが天の大祭司として執り成してくださいます。イエスは、悔いている罪人の代理人を務め、（私たちには功績がないので）私たちの功績を訴えるのではなく、私たちのために彼自身の功績を神に訴えてくださるのです。「それでまた、この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことがおできになります」（ヘブ7:25）。

◆ 生まれ変わったクリスチャンで、キリストの継続的な憐れみの必要を感じない人がいるでしょうか。言い換えれば、イエスによる新しい人生や、私たちの存在の中のすばらしい変化にもかかわらず、絶えず赦しの必要を自覚しない人がいるでしょうか。そうであれば、キリストが大祭司であると知るとは、なぜ私たちにとって貴重なのですか。

ヘブライ人への手紙は、地上のユダヤ人の聖所の奉仕が天の聖所（キリストが入り、私たちの大祭司となられた聖所）のひな型であったと教えています。二つの部屋を持ち、犠牲による清めの儀式を行った地上の聖所での奉仕は、「天にあるものの写しであり影であ……り、そのことは、モーセが幕屋を建てようとしたときに、お告げを受けたとおりです」（ヘブ8:5）。

地上の聖所の儀式が二つの部屋（聖所と至聖所）における奉仕を含んでいたように、天の聖所におけるキリストの奉仕も同様です。地上の聖所において、裁きの概念は贖罪日に表現され、その日、レビ記16章に記されているように、聖所が清められました。それは、大祭司が第二の部屋、つまり至聖所に入り、民のために清めと贖罪の働きを行った年に一度の時でした。

問5 ヘブライ9:20～23を読んでください。何が清められねばならないのですか。このことは、なぜ贖罪日のキリストの奉仕を明確に述べているのですか。

学者たちは、天の聖所自体が「清められねばならない」という言葉に驚いてきました。しかし、ひとたびこれが贖罪日について述べているのだと理解されれば、問題は解消します。ヘブライ9:23は、天の聖所におけるキリストの働きが、イスラエルの聖所で年に一度の贖罪日に大祭司によって行われたことの真の表現であることを示しているのです。地上の聖所を聖める地上の祭司の奉仕は、キリストがいつの日か天の聖所で行われる働きを予示していました。先の聖句は、この天の聖所の清めがキリストの昇天後すぐになされるとは述べていません。私たちはダニエル書の研究から、この奉仕の段階が1844年に始まったと考えることができます。それゆえに私たちは、終わりの時に直面しているクリスチャンとして、自分たちが存在する時代の厳粛さを理解すべきですが、キリストが過去において私たちのために成し遂げてくださったことと、現在、天の聖所の至聖所で行ってくださっていることへの確信の内に生きる必要もあります。

◆ 第一天使のメッセージは、次のように告げます。「神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである」（黙14:7）。裁きの現実、終わりが近いことを指し示しています。私たちの生き方は、この現実からどのような影響を受けるべきですか。

ヘブライ人への手紙は地上の聖所を、キリストが私たちの犠牲として地上で、また私たちの大祭司として天上で成し遂げてくださることのひな型、写しであると指摘しています。イスラエルの民の聖所は、常に福音の実物教訓となるべきものでした。それはユダヤ人に救済計画を教えるためのものであり、その計画には、犠牲、執り成し、裁き、罪の終結などが含まれていました。その一方、ダニエル書は、天の聖所におけるキリストの最後の働きの終末論的側面を理解しやすくさせるという点で、さらなる光を加えています。

「清め、裁き、擁護を強調しながら、ダニエル書の終末論的幻は、贖罪日の^ひ比喩^ゆを地球史のまさに終わりに投影している。清めは、天の聖所や、王や祭司としてのメシアの働きに直接結びついている。ダニエル書の幻は時間の要素を取り入れ、メシアが最終的な清め、裁き、擁護の働きを神の天の住まいでお始めになる救済史の中の具体的な時を、読者が割り出せるようにしてある」(『セブンスデー・アドベンチスト神学ハンドブック』394 ページ)。

話し合いのための質問

- ① エレン・G・ホワイトの次の引用文に目を向けてください。「古代において、民の罪が、信仰によって罪祭の上におかれ、そしてその血によって、象徴的に地上の聖所に移されたように、新しい契約においては、悔い改めた者の罪は、信仰によってキリストの上におかれ、そして実際に天の聖所に移されるのである。そして、地上の聖所の型としての清めが、それを汚してきた罪を取り除くことによって成し遂げられたように、天の聖所の実際の清めも、そこに記録されている罪を取り除くことによって、すなわち消し去ることによって、成し遂げられねばならない。しかし、これを完成するためには、だれが罪の悔い改めとキリストを信じる信仰によって、贖いの恵みを受ける資格があるかを決定するために、記録の書の調査がなされねばならない」(『希望への光』1799 ページ、『各時代の大争闘』下巻 136、137 ページ)。

「贖いの恵みを受ける資格がある」人た^らちを明らかにする二つのものとは何であると、彼女は言っていますか。それら^らが何であるかを理解することは、神の民にとって、とりわけ終わりの時の試練の中にあ^あって、なぜ重要なのですか。

- ② レビ記 16:15、16 を読んでください。血にはどのような意味がありますか。血は何をあらわしていましたか。血は、当時の贖罪日の儀式にと^とって、なぜとても重要だったのですか。今日の私たちにと^とって、血は何を意味していますか。



誰が律法を「変更」したか

暗唱 聖句

「彼はいと高き方に敵対して語り／いと高き方の聖者らを悩ます。彼は時と法を変えようとたくらむ。聖者らは彼の手へ渡され／一時期、二時期、半時期がたつ」（ダニエル 7:25、新共同訳）

「彼は、いと高き者に敵して言葉を出し、かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。彼はまた時と律法とを変えようと望む。聖徒はひと時と、ふた時と、半時の間、彼の手へわたされる」

（ダニエル 7:25、口語訳）

今週 の聖句

ローマ 8:1、7:15～25、7:1～14、ヨハネ 20:19～23、
使徒言行録 20:6、7、ダニエル 7:23～25、黙示録 13:1～17

安息日 午後 5/5

今週のテーマ

終末の諸事件を理解するうえで中心となるのは、神の律法の問題です。もっと具体的に言えば、第四条の戒め、第七日安息日の問題です。救いは信仰のみによるのであり、（安息日を含む）神の律法を守るとは決して救いをもたらさないと、私たちは理解していますが、終わりの時に、（第七日安息日を含む）神の律法を守ることが、私たちの真の忠誠がどこにあるかの、目に見えるしるしになるとも理解しているのです。

この違いは、黙示録 13 章、14 章に描かれている最高潮を迎えた終末の諸事件の中で特にはっきりします。その時、あらゆる権力を握った宗教勢力と政治勢力の集合体が、世界中の住人に偽りの形式の礼拝を強制するために協力するでしょう。このことは、黙示録 14:7 とまったく対照的です。その箇所では、神の民が「天と地、海と水の源を創造した方を礼拝」するように、つまり唯一の創造主だけを礼拝するように命じられています。

私たちは今週、神の律法、とりわけ安息日に目を向け、その律法の意図的な変更につながる問題と、終末が間もなく訪れる私たちにとってそれが意味することに触れます。

聖書の最もすばらしい約束の一つ「従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません」は、ローマ8:1にあります。これらの言葉は、直前の一連の思考の最後の仕上げ、つまり結論として登場しています。それゆえ、この聖句に先立ってパウロが語ったことを研究することによってのみ、私たちはここに見いだされる希望、約束をよりよく理解できるのです。

問1 ローマ7:15～25を読んでください。ローマ8:1のパウロの言葉を確認づけるどのようなことを、パウロはこの箇所ですべていますか。その要点は何ですか。

パウロが信者としての自分自身に的を絞って語っているのかどうかについて、キリスト教会の中で大きな議論がなされてきました。が、一つのことだけは、はっきりしています。確かに、パウロが罪の現実について語っているということです。パウロがここで言及している格闘は、だれもが、クリスチャンさえもが、何かしら共感できるものです。すべきではないとわかっていることをさせようとする、あるいは、すべきだとわかっていることをさせないようにする肉の力、自分の「中に住む罪」の力を感じたことのない人がいるでしょうか。パウロにとって、問題は律法ではありません。問題は、私たちの肉なのです。

正しいことをしたいのに、正しくないことをする自分に気づいたことのない人がいるでしょうか。たとえばパウロがここで、生まれ変わった1人のクリスチャンの生活における罪の必然性について語っていないとしても、確かに彼は、神に従おうとするだれもが直面する、逃れがたい格闘があることを強く説明しています。

そうして彼は有名な言葉を語ります。「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」(ロマ7:24)。彼の答えは、イエスと先のすばらしい約束の中に見いだされます。恵みによって「キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません」という約束です。確かに信者も格闘します。確かに誘惑に遭います。確かに罪は現実です。しかし、イエスへの信仰によって、信じる者たちはもはや律法によって死に定められません。彼らは確かに律法に従います。そうして、肉ではなく、霊に従って歩むことを身につけるのです。

◆ きょうの聖句ローマ8:1を読み直してください。パウロが述べていることに、あなたはどのように共感できますか。なぜこれはすばらしい約束なのでしょうか。

私たちは昨日の研究の中で、クリスチャンをも含むすべての人にとっての罪の現実について述べている聖句（ロマ7：15～25）に目を向けました。しかしパウロは、それらの前の聖句において、律法に注意を向けています。律法は、罪がいかに蔓延（まんえん）しており、いかに致命的であるかを示すものです。

律法と罪の関係について、律法によっては救われえないことに関して、ローマ7：1～14を読んでください。パウロがここで教えていることから、二つの重要な点が出てきます。第一にパウロは、律法が問題なのではない、と指摘しています。律法は「聖なるものであり、……正しく、そして善いものなのです」（ロマ7：12）。問題は罪であって、それが死をもたらします。第二の点は、私たちを罪や死から救う力が律法にはないということです。律法は罪や死という問題を指摘します。それどころか、律法は罪や死という問題をさらに一層明らかにしますが、その問題を解決するために何も提供しません。

（ほかの多くの聖句は無視し、）これらの聖句を用いて、律法（十戒）が無効になったと論じるのは、表面的な読み方をする者たちだけです。そのような理解は、パウロの指摘とは正反対です。もし律法が無効なら、パウロがここで書いていることは何もかも辻褄（つじぎま）が合いません。彼の議論が機能するのは、律法は罪の現実とその結果生じる福音の必要性を指摘するがゆえに依然として拘束力があるという前提に基づいてのことだからです。「では、どういうことになるのか。律法は罪であろうか。決してそうではない。しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。たとえば、律法が『むさぼるな』と言わなかったら、わたしはむさぼりを知らなかったでしょう」（ロマ7：7）。

律法についてだけでなく、なぜ律法が依然として必要なかということについて、ローマ7：13を注意深く読んでください。死をもたらすのは律法ではありません。罪です。律法は、罪がいかに致命的であるかを示すものにすぎません。律法は善いものであり、それゆえ罪を指摘します。律法には罪に対する答えがありません。答えを持っているのは福音だけです。パウロの論点は、クリスチャンとして、キリストによって救われている者として、私たちは「“霊”に従う新しい生き方」（ロマ7：6）で仕える必要があるということです。つまり私たちは、イエスとの信仰のつながりの中に生き、救いのための彼の功績と義（ローマの信徒への手紙の序盤での主題）を信じているのです。

◆ 律法を守ることに関するあなた自身の体験は、あなたが神の恵みを必要としていることをいかに示してきましたか。

私たちアドベンチストは、他教派のクリスチャン兄弟姉妹が、律法は廃止されたとか、私たちは律法の下ではなく、恵みの下にいる、と主張するのをしばしば耳にします。彼らの真意は、第四条だけが廃止されたということなのです。しかし、多くの人の真意はそれですらありません。彼らは、第七日安息日が週の第一日に、つまり日曜日に、イエスの復活を祝って置き換えられたと言っています。

彼らは、それを証明する聖句があると信じているのです。以下は、多くのクリスチャンが、旧約聖書の第七日から新約聖書の第一日に安息日に変更された証拠だと信じている、よく知られた新約聖書の聖句のいくつかです。私たちはこれらの聖句を読むとき、それらが本当に日の変更について語っているのだろうか、あるいは、変更を命じるレベルには至っておらず、単にその日に起こった出来事を描写しているのだろうか、と自問する必要があります。

問2 ヨハネ 20：19～23 を読んでください。弟子たちはなぜこの部屋に集まっていたのですか。ある人たちが主張するように、その集まりがイエスの復活を祝う礼拝であったのかについて聖句は何と述べていますか。

問3 使徒言行録 20：6、7 を読んでください。聖句に、安息日が日曜日に、つまり週の初めの日に変更されたことを示すものがありますか（使徒 2：46 も参照）。

問4 I コリント 16：1～4 を読んでください。彼らが週の初めの日に家で献金をたくわえなければならなかったという事実を除けば、この箇所は安息日を日曜日に変更することについて、何か教えていますか。

ここにあるのが、週の最初の日が第七日安息日にとって代わったという教理を促進するために用いられる聖書的「証拠」の核心部分です。さまざまな理由のために信者が集まったいくつかの機会の記録を除けば、一つの聖句として、これらの集まりが、第七日安息日の代わりとして週の最初の日に持たれた礼拝であったとは述べていません。このような主張は、これらの聖句の中に何世紀にもわたる日曜順守の伝統を読み込んでいるにすぎないのです。それは、そもそもなかったものをこれらの聖句の中に注入しています。

きのう触れたように、日曜日が安息日に置き換わったという考えを広めるためによく用いられる聖句は、そのようなことを述べていません。それどころか、新約聖書において第七日安息日に言及している箇所はみな、安息日が神の十戒の一つとして守られ続けていたことを明らかにしています。

問5 ルカ 4：14～16、23：55、56 を読んでください。これらの聖句は、キリストの死の前後における第七日安息日について、どのようなことを述べていますか。

キリストと一緒にいた女性たちが、いかに「安息日には掟に従って休んだ」（ルカ 23：56）かに注目してください。明らかに、その掟とは、シナイで石の板に記された第四条でした。このように、彼女たちがイエスと一緒にいたときに何を学んだにしても、彼女たちがイエスから（安息日の掟を含む）神の戒めを守ること以外の何かを学んだというしるしはありません。実際、キリストは御自分の弟子たちに、「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」（ヨハ 14：15）と言われました。キリスト御自身が守っておられたキリストの掟には、第七日安息日が含まれていました。もし仮に日曜日が安息日の代わりだとしたら、彼女たちはそれについて何も知らなかったことになります。

問6 使徒言行録 13：14、42～44、16：12、13 を読んでください。これらの聖句は、第七日安息日を守ることに對して、どのような証拠を提供していますか。週の最初の日を守ることに對しては、どんな証拠を提供していますか。

これらの聖句の中に、安息日が日曜日に変わったという証拠は見つかりません。それどころか、これらの聖句は、初期のイエスの信者たちの間で、第七日が習慣的に守られていたことをはっきり示しています。

使徒言行録 16：13 は興味深い聖句です。なぜなら、その出来事は会堂の外で起こっているからです。その信者たちは川岸に集まっており、そこは、何人かの人が「習慣的に」行って、祈る場所でした。しかも彼女たちは、イエスの死後何年も経過してから、第七日安息日にそうしていました。もし日曜日への変更がなされたとしたら、これらの聖句はそのことを何も伝えていないことになります。

◆ 第七日安息日について、あなたが日曜日順守者にあかしができる穏やかで非難がましくない方法は、どのようなものでしょうか。

神の律法、すなわち十戒は、依然として拘束力があり（ヤコ2:10～12も参照）、その律法には第七日安息日が含まれています。では、なぜ多くのクリスチャンは、正当化する聖書的理由がないにもかかわらず、日曜日を守るのでしょうか。

ダニエル7章は、四つの大きな帝国の興隆について述べています。バビロン、メディアとペルシア、ギリシア、そして第四にして地球上最後の帝国ローマです。ローマ帝国の終盤で、小さな角の勢力がこの帝国から生え出てくる様子が描かれています。生え出てきたものですが、それはローマ帝国の、まさに後期の一部です。この勢力が、法王制以外の何かである可能性があるでしょうか。法王制はローマから直接生じ、今日に至るまで、依然としてローマの一部です。イギリスの哲学者トマス・ホブズは、17世紀にこう記しました。「もし人がこの大なるキリスト教会の支配権の起源を考えるなら、それは、滅亡したローマ帝国の亡霊にほかならず、その帝国の墓の上に冠をいただいて座っている法王制度だ、と容易にわかるだろう」（『レビヤタン』463ページ、英文）。

ダニエル7:23～25を読んでください。この聖句は、日曜順守の起源を理解するうえで助けとなることを教えています。原語のアラム語は25節で、この小さな角の権力が律法を変えようと「企てた」ことを明らかにしています。どんな地上の権力が、実際に神の律法を変えることができるのでしょうか。

歴史の中で詳細ははっきりしませんが、私たちは、法王制ローマの下で第七日安息日が日曜順守の伝統に、つまり宗教改革が存続させ、21世紀に入っても続いているほど確実に定着している伝統に、置き換えられたことを知っています。今日、ほとんどのプロテスタントは、第七日に関する聖書の命令に従うよりも、依然として週の初めの日を守っています。

黙示録13:1～17を読み、ダニエル7:1～8、21、24、25と比較してください。私たちが終末の諸事件を理解するうえで助けとなる比喩が、これらの聖句の中で用いられています。ヨハネの黙示録は、ローマの後期（法王制の段階）に関する比喩を含むダニエル書の比喩をそのまま用いることで、黙示録に登場する権力者たちの命令に従って「礼拝」することを拒む人たちに降りかかる終末時代の迫害を指摘しています。

◆ 黙示録14:6、7のとりわけ、第四の戒め（出20:11）から取られた言葉を用いている7節は、礼拝を巡る終末時代の危機の中で、安息日が極めて重要になるだろうことを示すうえで、いかに助けとなりますか。

天で神に戦争をしかけた竜（黙 12:7）、つまりサタンと、「神の掟」（同 12:17、さらに 13:2、4 も参照）を守る地上の神の民に戦争をしかける竜とは、同じものです。実際、サタン自身が礼拝の対象にもなります（同 13:4）。それゆえサタンは、天で始めた神との戦争を地球でも続けようとします。そして、神に対するサタンの攻撃の中心は、神の律法を攻撃することなのです。

「神は、第 4 条の戒めのなかで、天と地の創造主として示されており、それによってすべての偽りの神々との区別が明らかにされている。第七日が、人間の休息の日として聖別されたのは、創造の業の記念としてであった。それは人間が、生ける神を、存在の根源、尊崇と礼拝の対象として、常に心に留めておくためであった。サタンは人々に、神への忠誠をつくさず、神の律法に従わせまいと努力している。それゆえに彼は、神が創造主であることを指し示す戒めを、特に攻撃するのである」（『希望への光』 1613 ページ、『各時代の争闘』 上巻 48、49 ページ）。

私たちが主を礼拝するのは、彼が「天と地」の創造主であられ、第七日が彼の創造者たることの基本的しるし、創造週にさかのぼるしるしだからです（創 2:1～3）。神の権威に対する攻撃において、サタンがそのような第一にして基本的な権威のしるし（第七日安息日）を狙うのも、不思議ではありません。

神は終わりの時に、神への忠誠を決して曲げない人たちを地上に持っておられることでしょう。その忠誠とは、神の戒め（創造主、私たちの礼拝に値する唯一のお方として具体的に主を指し示す唯一の戒めを含むすべての戒め）に従うことで明らかにされる忠誠です。

話し合いのための質問

- ❶ 罪の現実（存在）について語りながらも、神の律法は廃止されたと主張する人々には、どのような問題がありますか。そのような思考の道筋の中に、どんな大きな矛盾を指摘することができますか。
- ❷ 安息日ではなく、日曜日を主張する人たちと、あなたはどのような体験をしたことがありますか。あなたはどのような論法を用いましたか。それはどれくらい効果的でしたか。安息日を守ることは行いによって救いを得ようとするのだという、よく耳にする議論に、あなたはどうか対処することができますか。
- ❸ 私たちが安息日についてほかの人に語るときや、終末の諸事件に備えるとき、「獣のしるし」に関する挑戦がまだ起きていないことを明確にすることは、なぜ重要なのですか。



マタイによる福音書 24 章と 25 章

暗唱 聖句

「偽メシアや偽預言者が現れて、大きなしるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちをも惑わそうとするからである」
(マタイ 24：24、新共同訳)

「にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう」
(マタイ 24：24、口語訳)

今週の 聖句

マタイ 24：1～25、黙示録 13：11～17、マタイ 7：24～27、ルカ 21：20、マタイ 25：1～30

安息日 午後 5/12

今週のテーマ

イエスはマタイ 24 章と 25 章で、終末時代と備えの仕方について重要な真理を明らかにしておられます。ある意味で、これら二つの章は、終末の諸事件に関するキリストの教えでした。と同時に、もっと間近な未来に目を向けつつ、イエスはエルサレムの差し迫った破滅、御自分の民にとっての壊滅的な悲劇を見ておられます。

しかしキリストは、弟子たちへの言葉の中で、御自分に従う後世の者たち、とりわけ再び戻られるときに生きている最後の者たちにも語りかけておられます。イエスはやはり美しい未来を描いておられません。戦争、戦争のうわさ、飢饉、偽キリスト、迫害——この世の大部分、イエスの教会の大部分はこうなるのです。驚くべきことに、時代を振り返るとき、その預言がいかに正確であったかがわかります。それゆえに私たちは、私たちの時代にまだ成就していない預言に関しても、イエスを信じることができるのです。

しかしイエスは、これから起きることについて警告なさっただけではありません。彼はマタイ 25 章において、もし心に留められるなら、「人の子」がお戻りになるときに御自分の民を備えさせるだろうとえ話を語られました。確かに、困難な時代はやって来るでしょうが、イエスは一つの民を備えて、再臨のときに会えるようになさるのです。

十字架までの最後の日々、弟子たちはオリーブ山でイエスと語り合いました。神殿が破壊されるだろうと、イエスが言われるのを聞いている彼らの姿を思い浮かべてみてください。弟子たちが考えたことは、だれにもはっきりとはわかりません。しかし、弟子たちがあとで尋ねた質問から、神殿の崩壊と「世の終わるとき」（マタ 24：3）を彼らが関連づけたということはわかります。

問1 マタイ 24：1～25 を読んでください。終わりの時について、イエスは弟子たちに、どのような全体のメッセージをお与えになりましたか。

マタイ 24：1～25 は、何よりもイエスが気にかけておられたのは、終末に至るまで各時代を通じて神の民を混乱させる惑わしであることを明らかにしています。それらの惑わしの中には、偽預言者や偽メシアが含まれます。キリストの代弁者（偽預言者）だと主張する者や、キリストだと主張する者たちがあらわれるでしょう。しかもとんでもないことに、人々は彼らを信じてしまうのです。

私たちは、悲しくも力強い神の言葉の確証を目にしてきました。歴史を通じて、そして今日でさえ、確かに惑わす者たちがあらわれては、「私はキリストだ」と言います。なんと驚くべき預言でしょう！ 私たちはこの時代に生きているので、何世紀もの長い歴史を調べ、（キリストの時代に生きていた者たちにはできなかった方法で）その預言がいかに正確であったかを知ることができます。終末の危機が近づくにつれて、もしこのような惑わしが増加する一方であるとしても、私たちは驚くべきではありません。

また、信仰を肯定することとの関連で、イエスがこの世の状況をいかに描写しておられるかにも目を向けてください。人々はキリスト以降の地球史のさまざまな時代に、人間の苦しみや悲しみを取り除くだろう、または少なくとも大幅に減らすだろうと信じるものに希望を託してきました。政治運動であれ、技術であれ、科学であれ、理性であれ、人々は折につけ、こういったものがこの地上に理想郷をもたらすだろうと大きな希望を抱いてきたのです。しかし、歴史の痛ましい証言によって、このような希望は根拠が薄弱であるということがたびたび明らかにされました。およそ 2000 年前に語られたキリストの言葉は、いかにそれらの希望が見当違いであったのかを示しています。

◆ マタイ 24：25 を読んでください。この聖句から、信仰において私たちが肯定する助けとなる、どのようなことを引き出すことができますか。

問2 マタイ 24：9 と黙示録 13：11～17 を読んでください。イエスがマタイによる福音書のここでおっしゃったことと、黙示録の中でヨハネに靈感を与えて書かせたことの間には、どのような類似点がありますか。

終末時代の御自分の民に対するキリストの懸念には、諸国の民を真の信仰に敵対させ、この世の偽りの礼拝を押しつけるように仕向ける地球規模の惑わしが含まれています。固く立つ者たちは、憎しみ、苦難、死にさえ遭遇するでしょう。

問3 マタイ 24：13 を読んでください。世界規模の反対の中にあっても忠実であり、救われるための鍵は何ですか。

「聖書の真理によって心を堅固にした人たち以外には、だれも最後の大争闘に耐え抜くことはできない」(『希望への光』1888 ページ、『各時代の大争闘』下巻 359 ページ)。この言葉は、聖書の真理で心を堅固にしている人はみな、終末時代のいかなる惑わしにも押し流されないということを意味します。彼らは現代の真理にしっかり立たねばなりません。さもなければ、惑わしが彼らを圧倒するでしょう。

問4 マタイ 7：24～27 を読んでください。神に忠実であり続けるために、ほかに何が重要ですか。

知的に神の言葉にしっかり立つことは重要ですが、イエスによれば、それだけでは、私たちが遭遇する試練の中で立つためにはまだ不十分です。私たちは学んだことを実行しなければなりません。つまり私たちは、イエスがそうであられるように、真理に従う必要があります。先のたとえ話の中で、家を建てたいずれの人もイエスのおっしゃることを聞きました。2 人の違い、倒れたか、倒れなかったかの違いは、イエスが教えられたことに従ったか、従わなかったかでした。

◆ なぜ従う者は立ち、従わない者は倒れるのですか。服従は、人が揺るぎない信仰を持ち続けることに、どのような影響を与えますか。

キリストは終わりの時に関する偉大な説教の中で、ダニエル書から引用した比喻（ダニ9：27、11：31、12：11）の「憎むべき破壊者」（マタ24：15）に注意を向けておられます。

神は、偶像礼拝（申27：15）や不道徳な性行為（レビ18：22）など、神の律法を著しく破壊することを「破壊者」と宣言なさいました。それゆえ、この「憎むべき破壊者」には、ある種の宗教的背教が含まれていました。

問5 マタイ24：15とルカ21：20を読んでください。これらの聖句は、イエスが「憎むべき破壊者」について語られたことを理解するうえで、どんな助けとなりますか。

これら二つの聖句は、イエスの預言には、差し迫った意味で、ひどい破滅が西暦70年にエルサレムを襲うことが含まれていることを明らかにしています。その時、異教ローマがエルサレムの町だけでなく、聖なる神殿をも破壊するのです。

しかし、この預言には第二の成就があります。なぜなら、エルサレムの破滅のような、より差し迫った出来事は、未来（終末の諸事件）の予型だったからです。「キリストは、不信と反逆によってかたくなになり、急速に神の刑罰を受けようとしていた世界を、エルサレムが象徴しているのを見られた」（『希望への光』1597ページ、『各時代の大争闘』8上巻ページ）。

ダニエル12：11と11：31では、「憎むべき荒廃をもたらすもの」がローマの後期である法王制の段階とのつながりで登場します。救済と執り成しの代替制度が組み込まれている法王制は、キリストが私たちのために成し遂げられたこと、そして今現在、天の聖所でなしておられることを侵害しようとするものです。

ダニエル8章、とりわけ9～12節は、これらの出来事を歴史的背景の中で、つまり二つの段階を持ったローマの権力によって理解する助けとなります。第一の段階は、小さな角が水平方向に急速に拡張することの中に見られますが（ダニ8：9）、それは広大な異教ローマ帝国を示しています。第二の段階では（同8：10～12）、その小さな角が垂直方向に成長し、星のうちのいくつかを投げ落とし（神の民を迫害し）、「万軍の長」（同8：11）なるイエスにまで力を伸ばします。これは、異教ローマ帝国の崩壊の中から生じた法王制の段階をあらわしますが、依然としてローマです（それゆえ、小さな角という一つの象徴が、同じ権力の二つの段階をあらわしています）。ダニエル7：9、10における裁き、同8：14における聖所の清め、マタイ24：29における天のしるしはみな、終わりの時に神が御自分の民のために介入されることを示唆しています。

マタイ 24 章における再臨のしるしについての説教のあと、イエスは次の 25 章で、再臨の備え方について話しておられます。マタイ 25:1～13(「十人のおとめ」のたとえ話)を読んでください。イエスは 10 人のおとめについて語ることで、説教のこの段階を始められます。「おとめ」と呼ばれていることは、彼女たちがクリスチャンと称する人たちをあらわしていることを示唆します。彼女たちは、大争闘においてサタンの側にいませんでした。彼女たちは「天の国」(マタ 25:1) にたとえられています。しかし終わりの時に、彼女たちは全員、眠り込んでいたのです(同 25:5)。キリストは、再臨の時に準備ができているように、目を覚ましていなさい(同 24:42)、とすでに警告しておられました。

10 人のおとめは全員がともし火を持ち、全員が花婿を迎えに出て行きました。それは、彼女たちが主の到来を待ち望んでいたことを意味します。遅れがあり、主の到来を信じていた者たちはみな、眠ってしまいました。突然、真夜中に、彼女たちは起こされます。花婿がやって来たのです(マタ 25:1～6)。

愚かなおとめたちは、準備ができておらず、びっくりしました。なぜでしょうか。ある訳によれば、「ランプが消えてしまったのです」(マタ 25:8、柳生訳)とあります。ギリシア語の原文に忠実な別の訳では、「わたしたちのともし火は消えそうです」となっています。炎はまだちらちら瞬いていました。彼女たちはわずかながら油を持っていましたが、キリストに会う備えをするには不十分でした。

では、何が問題だったのでしょうか。このおとめたちは、キリストが戻られるのを待ってはいるものの、キリストとの表面的な体験しかないクリスチャンをあらわしています。彼らは油をいくらか持っていて、人生の中で聖霊がいくらか働かれたのですが、それは炎がちらちら瞬く程度にすぎません。多くを必要とするときも彼らは少しで満足していました。

「聖霊は、人が心の中に新しい性質の植えつけられるのを望んで、同意するのに応じて、人の心にお働きになるのである。ところが、思慮の浅い女によって代表されている人々は、表面的な働きに満足している。彼らは、神を知らない。彼らは、神の品性を学んでいない。神と交わっていない。であるから、彼らはいかに神に信頼し、ながめ、生きるべきかを知らないのである。彼らの神への奉仕は、形式化してしまう」(『希望への光』1348、1349 ページ、『キリストの実物教訓』387 ページ)。

◆ 私たちはどのように自分自身を見つめ、愚かなおとめたちと同じ過ちを犯さないようにできますか。もし〔主を待つという〕この自分自身の役割がわかるなら、私たちはいかに変わることができますか。

マタイ 25:14～30 を読んでください。キリストの再臨に備えるうえで、私たちの賜物を用いることには、役割があります。イエスはここで直前のたとえ話とは異なるたとえ話をなさいましたが、いずれもキリストの再臨に備えることに関するものです。いずれのたとえ話も、備えのできていた人とできていなかった人を取り上げています。またいずれも、自分自身の霊的無関心によって永遠の滅びに遭遇した人々の運命を示しています。

10 人のおとめにとって油が聖霊をあらわしていたように、「タラントン」（マタ 25:15、原語のギリシア語では「タランタ」）は才能をあらわします。「タラントンとは、あらゆる生まれつきの素質とともに、聖霊の特別な才能を意味する」（『SD A 聖書注解』第 5 巻 510 ページ、英文）。

このたとえ話の中の僕たちは全員、主人から財産を受け取りました。それらは主人の財産であり（マタ 25:14）、「それぞれの〔僕たちの〕力に応じて」（マタ 25:15）託されたという点にも注目してください。彼らに与えられた賜物は、預けられたものでした。事実上、この僕たちは、自分が所有しているものではなく、彼らが責任を負っているものの管理者でした。だから主人は帰って来たときに、「彼らと清算を始めた」（マタ 25:19）のです。

霊的賜物は、聖霊によってもたらされます（I コリ 12:1～11、28～31、エフェ 4:11 参照）。ほとんど賜物を持っていないと思っている人たちには、良い知らせがあります。賜物は、与え主がいなければ、受け取ることができません。それゆえ、このような人たちは、最大の賜物であられる聖霊を受けることによって彼らの賜物を受け取ることができます。

賜物は、キリストによってすでに私たちのものですが、実際にそれを所有することは、私たちが聖霊を受け、聖霊に屈服することにかかっています。利益のなかった僕が過ちを犯したのはここにおいてです。彼は賜物を与えられていましたが、それを用いて何もしませんでした。彼は自分の賜物を活かさずに放置しました。彼は、寛大にも与えられたものを受け取って、それで何かをするという努力をしませんでした。結果として、イエスは彼を「怠け者の悪い僕」（マタ 25:26）とお呼びになりました。それは痛烈な非難でした。

◆ イエスは、終わりの時と再臨との関連でこのたとえ話を語られました。では、私たちの才能を用いることが、終わりの時に備えるうえでいかに重要であるかということについて、このたとえ話は何を教えてくださいか。

「タラントを活用しなかったのは、一番小さい賜物を渡された者であった。これは、自分の賜物は小さいから、キリストのご用に活用しなくてもよいと思うすべての者に対して与えられた警告である。もし彼らも、何かの大きなことができれば、どんなに喜んで、それをするのであろう。しかし、ほんの小さい奉仕しかできないから、何もしなくてよいと、彼らは考えるのである。これは間違っている。神は賜物を分配なさることによって、人の品性をためしておられる。自分のタラントの活用を怠るものは、不忠実な僕である。もし、彼が5タラント渡されたとしても、1タラントを土に埋めたように、5タラントを埋めたことであろう。彼が1タラントを活用しなかったことは、天の賜物を軽視したことをあらわしている。『小事に忠実な人は、大事にも忠実である』（ルカ16:10）。小さい事は、それが小さいために、その重要性が認められない場合がよくある。しかし、小事は、人生において実際により訓練を与えるものである。クリスチャンの生活の中では、真に不必要なものはない。小事の重要性を軽視するために、品性形成上のあらゆる危険にあうのである」（『希望への光』1326ページ、『キリストの実物教訓』331、332ページ）。

話し合いのための質問

- ① 地上に理想郷をもたらすと人々が信じてきたイデオロギーや理想論には、どのようなものがありますか。例外なく、なぜすべては失敗してきたのですか。
- ② 神が私たちに「しなさい」とお命じになることに服従することのどこが、私たちの信仰を強めるのですか。言い換えれば、応答の行いの伴わない信仰は、なぜ「死んだもの」（ヤコ2:26）なのですか。「神の掟を守（る）」（黙14:12）者たちを待ち構えている試練について考えるなら、思いがけない時にやって来ることに今備えることは、なぜとても重要なのですか。
- ③ 10人のおとめについて、さらに考えてください。彼女たちの物語は、表面的に、またさまざまな意味で似ている私たちにとって、なぜ警告になるべきですか。どうしたら私たちは、愚かなおとめたちのように自己欺瞞に陥らないようにできるのでしょうか。
- ④ 可能であれば、「選ばれた人たち」でさえ惑わされうるとするのは、どういう意味でしょうか。私たちは「選ばれた人たち」をどう理解していますか（マタ24:31、ロマ8:33、コロ3:12参照）。このことは、惑わしがどれほど深刻になるかということについて、何を物語っていますか。



天と地を創造された神を礼拝せよ

暗唱 聖句

「わたしはまた、別の天使が空高く飛ぶのを見た。この天使は、地上に住む人々、あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族に告知知らせるために、永遠の福音を携えて来（た）」

（黙示録 14：6、新共同訳）

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣傳えるために、永遠の福音をたずさえてき（た）」

（黙示録 14：6、口語訳）

今週の 聖句

黙示録 14：6、7、マタイ 24：14、ガラテヤ 3：22、
ルカ 23：32～43、創世記 22：12、黙示録 14：8～12

安息日 午後 5/19

今週のテーマ

私たちアドベンチストは、「いま持っている真理」（Ⅱペト 1：12、口語訳）「しばしば『現代の真理』と訳される」という聖書の考えを信じています。それはつまり、長年にわたって主からますます与えられる光によって、真理が必要なときに、神がそれを人間に示されるという考えです。創世記 3：15 の最初の福音の約束は、女の子孫を通して希望がもたらされることを、罪を犯した夫婦に明らかにしました。この福音の約束のさらなる啓示がアブラハムへの約束であり、「アブラハムは大きな強い国民になり、世界のすべての国民は彼によって祝福に入る」（創 18：18）というものです。そして、「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命をささげるために来たのである」（マコ 10：45）と宣言されたイエスの到来は、言うまでもなく、この福音の真理のさらに大きな啓示です。

私たちは今日、黙示録 14：6～12 の三天使の使命が、キリストの再臨と私たちクリスチャンのあらゆる希望の成就に先立つ終わりの時に生きる者たちにとっての「いま持っている真理」であると信じています。

私たちは今週、第一天使のメッセージに特に焦点を合わせます。なぜなら、終末の危機のただ中で忠実であろうとする者たちにとって極めて重要な真理が、そこには含まれているからです。

黙示録14:6、マタイ24:14、28:19を読んでもください。これらの聖句は、教会としての私たちの目的にとって、伝道やあかしがどれほど重要であるかを理解するうえで助けとなります。ある意味で、第一天使のメッセージは、終わりの時という背景の中で与えられた大宣教命令（マタ28:19）だと言えるかもしれません。確かに、それは「いま持っている真理」です。

これら三つの聖句がすべて、「全世界」と「あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族」への伝道に重きを置いていることに注目してください。言い換えれば、このメッセージは範囲が普遍的です。すべての人がそれを聞く必要があります。

問1 ガラテヤ3:22を読んでもください。全世界が福音を耳にする必要があります。この聖句は、私たちがその理由を理解するうえで助けとなるどのようなことを述べていますか。

罪の普遍性が、私たちの使命と召しの普遍性を説明します。「あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族」が悪事を働き、神の律法を犯し、「罪の支配下に閉じ込められ」てきました。エデンにおけるアダムの墮罪は、全人類に影響を及ぼしました。影響を受けなかった国民、種族、民族はありません。私たちはみな、罪の直接的な報いを受けます。そして、もし治療法が提供されなければ、私たちはだれもが最終的な結果、すなわち永遠の死に直面するでしょう。

言うまでもなく、その治療法は提供されました。それは、罪の問題の唯一の解決策であられるイエスの生涯、死、復活、そして天の聖所における彼の奉仕です。神がイエス・キリストによって提供された大いなる希望を、すべての人が知る必要があります。だからこそ、アドベンチストは全世界に出て行って、イエスのメッセージをまだ耳にしていない人たちにそれを届けようとしているのです。

◆ 福音のメッセージを人々に広めることは、それを実行する人たちにとっていかに靈的に有益ですか。言い換えれば、人々に伝道することは、なぜイエスの来臨に備える最善の方法の一つなのでしょう。

黙示録 14：6において、この世に宣べ伝えるメッセージは「永遠の福音」です。それは、何の希望もないこの世に生きる人々への希望のメッセージです。

問2 ルカ 23：32～43を読んでください。この物語は、すべての罪人にとっての「永遠の福音」の大いなる希望を、いかに明らかにしていますか。

エレン・G・ホワイトは、この犯罪人について次のように書いています。「この男は常習犯ではなかった。……彼は、罪の自覚をおしころそうとして、ますます罪の深みにとびこみ、ついに捕らえられて犯罪者としてさばかれ、十字架の死を宣告されたのである」（『希望への光』1072 ページ、『各時代の希望』下巻 268 ページ）。

しかし、彼にどんなことが起きたでしょうか。十字架にかけられたとき、この犯罪者はイエスの正体を垣間見て、叫びました。「イエスよ、あなたの御国においてになるときには、わたしを思い出してください」（ルカ 23：42）。

そして、イエスはどのように応じられたでしょうか。「友よ、私はあなたを助けてあげたいが、あなたはますます罪の深みに飛び込むことによって罪の自覚を押し殺すべきではなかった」とおっしゃいましたか。「あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない」（マタ 5：20）とイエスはかつてなさった説教から引用なさいましたか。形はどうであれ、イエスは犯罪者の過ちを指摘なさいましたか。

いいえ。イエスは、欠陥だらけの品性を持ったこの犯罪者、義の道において何もささげるものがなく、さっきまでののしっていたこの強盗をご覧になりました（マタ 27：44）。イエスは彼を新しい人としてご覧になって、（ほぼ）このようなことを言われたのです。「私は今ここで言おう。私はあなたに、今ここで確約しよう。あなたの罪、悪事、過ちは赦される。だから、『あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる』（ルカ 23：43）。

これが、第一天使の使命の基礎である「永遠の福音」です。この真理がなければ、律法、安息日、死者の状態などについて私たちが教えるほかのことは、いずれも重要ではありません。「永遠の福音」がその根底になれば、こういった教えは何の役に立つでしょうか。

◆ この物語から、あなたはどのような希望を得ることができますか。

全世界に向けての「永遠の福音」の宣布について述べたあと、第一天使の使命は、このメッセージをさらに詳しく説明します。私たちは「永遠の福音」を宣べ伝えるとき、現代に対するこの福音のメッセージの一部である真理を含めなければなりません。言い換えれば、終わりの時に対する「いま持っている真理」は、黙示録 14:7 も含むということです。

黙示録 14:7 を読んでください。神を畏れることと、その栄光をたたえることとは、無関係な概念ではありません。もし私たちが聖書的な意味で真に神を畏れるなら、私たちは神の栄光をたたえるでしょう。一方は他方に直結しています。

問3 次の聖句を読んでください（創 22:12、出 20:20、ヨブ 1:9、コヘ 12:13、マタ 5:16）。「神を畏れ（る）」とはどういうことか、それは神をたたえることといかに関係しているのかを理解するうえで、いかにこれらの聖句は助けとなりますか。

上記の聖句では、神を畏れることが神に服従することと結びつけられており、私たちが神に服従し、正しいことを行うとき、私たちは神をたたえるのです。神を畏れるとは、神に畏怖の念を抱くこと、神を崇敬することだといしばしば言われますが、それはもっと深まるべきです。私たちは神を畏れるように言われています。私たちは墮落しており、罪人であり、死に値する存在です。時として、自分の行為の悪意や、その行為に対して公正で義なる神の御手からもたらされるべきものを衝撃的に自覚したことのない人がいるでしょうか。これが神の畏れです。そしてこれが、まず赦しを求めて私たちをキリストの十字架へと駆り立て、次に私たちをその悪——もし十字架がなければ、私たちの魂を失わせることになる悪（マタ 10:28 参照）——から清める神の力を求めるように駆り立てる畏れなのです。

◆ 神を畏れることに関して、あなたにはどのような体験がありますか。このような畏れを強く感じることは、私たちの霊性にとっていかにプラスとなりますか。また、私たちの信仰や、神が私たちに求めておられることをもっと真剣に受け止めるうえで、いかに助けとなりますか。

第一天使の使命において、神を畏れることと、その栄光をたたえることは、裁きと結びついています（黙 14:7）。もし聖書が何らかの教えについて明確であるとしたら、それは明らかに、神が正義と裁きの神であられるという点です。いつの日か、この世に欠けている裁きと正義が、確かにもたらされます。

人々は神を畏れる必要があります。それゆえに、「永遠の福音」には裁きの現実が含まれます。これら二つの要素は、どのような関係にあるのでしょうか。もし福音が「良い知らせ」を意味するのなら、私たちはみな罪人であり、神の律法を犯してきましたが、裁きの日がやって来るとき、十字架上のあの犯罪者のように、自らの罪と律法違反に見合った罰を受けることがないということです。

問4 次の聖句を読み、「自分の功績を拠り所にするのは、どれくらい役に立つだろうか」と自問してください（マタ 12:36、コヘ 12:14、ロマ 2:6、I コリ 4:5）。

私たちの髪の毛の数を知っておられる神が、この世を裁かれます。しかし、まさにそれだからこそ、「永遠の福音」は良い知らせなのです。裁きはやって来ますが、イエスの忠実な弟子たち、主イエスの名によって洗われ、聖なる者とされ、義とされている者たちは（I コリ 6:11）、罪に定められることはありません。なぜなら、イエス・キリストが彼らの義であり、彼らがその裁きを通してできるようにさせるのはキリストの義だからです。

「人間はこのような告発に自分で対処することができません。罪に汚れた服に身を包み、自分の罪を認め、人間は神の前に立ちます。しかし、私たちの擁護者なるイエスが、悔い改めと信仰によって自分の魂を彼に預けてきたすべての人たちのために、効果的な嘆願をしてくださる。イエスは彼らの言い分を申し立て、カルバリーの力強い証拠によって訴える者を打ち負かします。十字架の死に至るまでイエスが神の律法を完全に守られたことが、天と地の一切の権力を彼に与えたので、イエスは罪深い人間のために憐れみと和解を父なる神にお求めになります」（『教会への証』第5巻 471 ページ、英文）。

◆ 私たちがどうしても赦しを必要としていることについて、裁きの現実は何を教えますか。あなたに悪事を働いた人に、神がイエスを通して与えてくださるような恵みや赦しを、どうしたら与えることができるようになるでしょうか。

問5 黙示録 14：6、7を読み直してください。第一天使の使命全体の中には、どのような具体的要素がありますか。それらはいかに関連し合っていますか。

福音、この世に告げ知らせよという命令、神を畏れ、その栄光をたたえよという命令には、創造主として神を礼拝せよという命令が伴っています。それもそのはずです。「いま持っている真理」のほかのすべての側面（永遠の福音、告げ知らせよという命令、裁き）は、私たちの創造主としての神を離れてどんな意味があるのでしょうか。これらの真理も、ほかのあらゆる真理も、主がすべてのものを創造されたという基本的な真理から生じるのです。創造主として主を礼拝することによって、私たちは基本に立ち返っています。人間とは何なのか、生きているとはどういうことなのか、地上のほかの生き物と違って神にかたどって造られるとはどういう意味なのか、といった基本に立ち返っているのです。創造主としての主を礼拝することで、私たちは、自分が存在するために、また未来の希望のために、主に依存していることを自覚します。だから、第七日安息日を守ることは、とても重要です。それは、神だけが私たちの創造主であり、私たちは神だけを礼拝するということの特別な承認です。つまり、福音や裁きとともに、創造主として主を礼拝せよという命令が、ここでは強調されています。

黙示録 14：8～11を読んでください。この聖句は、創造主として主を礼拝することの重要性について述べています。終末の諸事件が繰り広げられるとき、創造主ではなく、獣とその像を拝むようにという圧力が世界中にかかるでしょう。獣とその像を拝む者たちの運命に関する恐ろしい警告を考えるなら、私たちは、人間の礼拝を受けるに値する唯一の創造主として神を礼拝することが強調されるわけを、もっとよく理解できます。終末の危機の中で、この真理はかつてないほど重要になるでしょう。

◆ 時間を取って、被造世界のとてつもなく驚くべきものについてじっくり考えてください。私たちはそれらから、この世界をすべて創造なさったお方について、また、なぜ彼だけが私たちの礼拝を受けるにふさわしいのかということについて、何を学ぶことができますか。

聖書の研究者たちは、黙示録 14:7 の「天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい」という命令と、出エジプト記 20:11 の第 4 条との間につながりがあることを昔から気づいていました。安息日は、「六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造（られた）」（出 20:11）という事実を指し示しているからです。言葉遣いは非常に似ていますが、黙示録の聖句には変更点があります。そこでは、主を「水の源」を造られたお方と指摘しているのです。

神学者ジョン・ボルドウィン¹は、こう論じています。『水の源』という語句の裏に神の意図があるとすれば、なぜイエスは天使に、出エジプト記 20:11 で列挙されている類似したものに変更を加えさせられたのだろうか。なぜ天使は、木とか、鳥とか、魚とか、山とか、何かほかの種類の被造物ではなく、『水の源』と言ったのだろうか。

神の裁きという特別な時の到来に関する神聖な告知という状況で『水の源』に言及したのは、たぶん読者の注意を、神の裁きの前の時代に向けさせようとしてのことだろう。……恐らく神は、『水の源』という言葉によって洪水をほのめかすことで、御自分が永遠に誠実で恵み深い神であるとともに、確かに裁きの神でもあるという真理（いずれも創世記の洪水物語の中で裏づけられていること）を強調しようと意図しておられるのだろう。もしそうであれば、『水の源』という語句によってもたらされる洪水という含意が持つ個人的かつ霊的な意味は、黙示録 14 章の第一天使によって今や告げられた個人個人の神の裁きの過程が、新たに終末時代に由々しくも到来したことを、読者に真剣に受け止めさせようとする^{あがな}ことなのかもしれない（『創造、大災害、カルバリー——地球規模の洪水は、なぜ贖いの教理にとって不可欠なのか』27 ページ、英文）。

話し合いのための質問

- ① 十字架上の犯罪人の物語から、私たちはほかにどのような教訓を学ぶことができますか。もしこの犯罪人が恩赦になり、十字架から降ろされ、生き残ったとしたらどうでしょうか。彼はいかに異なる人生を送ったことでしょうか。その答えは、私たちの人生を変えるキリストの力について、何を物語っていますか。



サタンの終末時代の惑わし

暗唱 聖句

「この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた」

(黙示録 12：9、新共同訳)

「この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された」

(黙示録 12：9、口語訳)

今週の 聖句

黙示録 2：13、24、Ⅱコリント 11：13～15、
詩編 146：4、創世記 1：1～2：3、黙示録 13：1～17

安息日
午後
5/26

今週のテーマ

サタンは天においても、追放される前に天使たちを惑わすために働きました。「ルシファーは、神のみ座のすぐ近くにある自分の座を離れて、天使たちの間に不満の精神をひろめるために出て行った。彼は神秘的な秘密をもって働き、一時は神に対する尊敬をよそおって自分の真意をかくし、天の住民を支配している律法によって不必要な束縛が加えられているとほめかしながら、律法に対する不満の念を引き起こそうと努力した」(『希望への光』1837 ページ、『各時代の大争闘』下巻 231 ページ)。

エデンにおいて、サタンは蛇に変装し、エバに対して策略を用いました。今日に至るまで、そして千年期以後でさえ(黙 20：8)、歴史を通じてずっと、彼は自分の目的を達成するために惑わしを用いるのです。

残念ながら、彼は私たちのだれよりも賢く、力強く、狡猾であり、それゆえに私たちは、彼の策略から自分の身を守るためにイエスと御言葉に寄りすがらする必要があります。「あなたたちの神、主につき従ったあなたたちは皆、今日も生きている」(申 4：4)。ここで支持されている原則は、確かに今日でも当てはまります。

私たちは今週、悪魔の最も効果的な惑わしのいくつかと、どうしたら私たちはそれから守られうるのかということに目を向けます。

今期の第1課では、残念なことに、宇宙を超えて地球にまで及んだ宇宙規模の争いを話題にしました。

しかし問題は、クリスチャンを含む多くの人がこの大争闘を信じていないことです。彼らはサタンの存在を信じていないからです。彼らにとって、サタンや悪魔について述べている聖書の言葉は、この世の悪や苦しみを説明するための非科学的な文化の表現にすぎません。あまりにも多くの人にとって、人類に対して邪悪な計画を持つ超自然的な文字どおりの存在というのは、映画『スターウォーズ』で有名なダース・ベイダーのような、空想科学小説に出てくるもののなのです。

問1 黙示録の次の聖句を読んでください（黙2：13、24、12：3、7～9、12、17、13：2、20：2、7、10）。サタンの存在について、特に終末の諸事件における彼の役割について、これらの聖句はどのようなことを教えていますか。

黙示録は、終わりの時にサタンがこの世の多くの住人をどれほど思いどおりに操り、彼らを救いから引き離すだけでなく、彼らを用いてイエスに忠実である者たちを迫害させるかも示しています。

サタンのあらゆる「やり口」（Ⅱコリ2：11）——「心、精神」に相当するギリシア語「ノエマタ」の訳語——の中でも、恐らく最大の惑わしは、彼が存在しないと人々に信じ込ませることです。詰まるところ、存在すると思っていない強力な敵から、だれが逃れようと思うのでしょうか。多くの人がクリスチャンであると自称しながらも、文字どおりの悪魔という考えを真剣に受け止めていないというのは、驚くべきことです。しかし彼らがそのような立場を取るのは、（とりわけ時の終わりが近づく）この世におけるサタンの働きや策略を明らかにしている聖書の中の多くの言葉を見逃すか、あるいは根本的に解釈し直すことによってです。これほど確かな聖書の証拠にもかかわらず、多くの人がサタンの文字どおりの存在を認めようとしていません。このことは私たちにとり、聖書が真に教えることを理解することがいかに重要であるかの強力な暗示です。

◆ 黙示録は（とりわけ終末時代における）サタンの陰謀について述べていますが、黙示録12：11からどのようなすばらしい希望を見いだすことができますか。悪魔に対抗する力の源は何ですか。

問2 次の聖句を読んでください。サタンの惑わしの力について、どのようなことを教えていますか。

Ⅱコリント 11：13～15 _____

Ⅱテサロニケ 2：9、10 _____

黙示録 12：9 _____

黙示録 20：10 _____

先の課で述べたように、イエスは弟子たちに終末時代の惑わしについて警告なさっておられました。その中でも特に彼が警告されたのは、「多くの人を惑わす」(マタ 24：5) だろう偽キリストや偽預言者でした。

しかし、私たちが知っていなければならない終末時代の惑わしは、偽キリストや偽預言者だけではありません。大争闘における私たちの敵には、惑わしうるすべての人を惑わすために考案された多くの策略があります。クリスチャンとして、私たちはそれらの策略を知る必要があります。そしてそれは、聖書を知り、聖書の教えることに従うことによつてのみ可能なのです。

エレン・G・ホワイトは、そのような大いなる惑わしのうちの二つが何であるかを説明しています。「サタンは、靈魂不滅と日曜日の神聖化という2つの重大な誤りを通して、人々を彼の欺瞞のもとに引き入れる。前者は心靈術の基礎を置き、後者はローマとの親交のきずなを作り出す。合衆国の新教徒は、率先して、心靈術と手を結ぶために淵を越えて手を差し伸べる。彼らはまた、ローマの権力と握手するために深淵を越えて手を差し出す。この三重の結合による勢力下に、アメリカはローマの例にならって良心の権利をふみにじるのである」(『希望への光』1885 ページ、『各時代の争闘』下巻 350 ページ)。

彼女がこれらの言葉を書いてから多くの年月が過ぎ去ったにもかかわらず、「2つの重大な誤り」がキリスト教世界の中ではびこり続けているのを目にするというのは、なんと信じがたいことでしょう。

◆ 聖書の真理を知ることとその真理に自ら進んで従うことは、なぜとりわけ終末時代に悪魔の惑わしに対抗するために持っている最も強力な武器なのですか。

問3 次の聖句は「死者の状態」についてどのようなことを教えていますか（コヘ9：5、6、10、詩編115：17、146：4、Iコリ15：16～18、ダニ12：2）。「2つの重大な誤り」の内の一つに対して、これらの聖句はいかに私たちをしっかりと守ってくれますか。

ここ数十年にわたって、（心拍も呼吸も停止して）「死んだ」のに生き延び、意識を取り戻した人たちに関する話が、大いに注目を集めてきました。多くの場合、彼らは「死んだ」と思われたあとにも意識が存在したという、信じがたい体験を語るのです。自分が空中を漂い、上から自分自身の体を眼下に見た、と言う人もいれば、自分の体から漂い出て、光とぬくもりを持ったすばらしい存在と会い、その人が優しさや愛についての真理を擁護した、と報告する人もいます。亡くなった親戚と会って話をした、と語る人たちもいます。

この現象は、「臨死体験」という学術名がつけられるほど、おなじみになりました。「臨死体験」は、依然として意見が分かれているものの、多くのクリスチャンが、それを靈魂の不滅の証拠や、魂が死に際して意識の存在するもう一つの領域に向かうという考えの証拠として用いてきました。

しかし言うまでもなく、臨死体験というのは、「2つの重大な誤り」の一つが別のあらわれ方をしたものです。どのような形にせよ、死に際しても魂が生き続けると信じる限り、その人は、大抵のオカルトや心霊術の惑わし、つまり私たちはイエスを必要としないという考えを（あからさまに、または、それとなく）容易に助長する惑わしにさらされます。実際、臨死体験をした人のほとんどが、彼らの会った靈的存在や死んだ親戚は、愛、平和、善について励ましの言葉を口にしたものの、（聖書の最も基本的な考えである）キリストによる救い、罪、裁きが来ることについては語らなかつた、と言いました。ある人は、たぶん彼らはキリスト教の来世を体験すると同時に、キリスト教の最も基本的な教えも味わたに違いがない、と思うでしょう。しかし、彼らが言われたことは、しばしばニューエイジの教義によく似ており、そのことは、この人たちの多くが、「死ぬ」体験をする前よりもキリスト教に傾倒せず、離れて行く理由を説明しています。

◆ 私たちはクリスチャンとして、自分の感覚では何か違うものを感じる
ときでも、なぜ神の言葉に従わなければならないのですか。

サタンは、魂の不滅に関してこの世を大いに惑わしてきましたが、もしかするとそれ以上に、日曜日のために聖書の安息日を侵害することに成功し（第6課と第8課参照）、キリスト教史のほとんどの時代においてそうしてきました。

近年、悪魔は人々の心の中における第七日安息日の影響力を減らす別の惑わしを考え出しました。進化論です。

創世記1:1～2:3を読んでください。これらの聖句を大雑把に読んだとしても、聖書の天地創造物語に関して二つの点が明らかです。第一に、すべては計画され、計算されていました。思いつきのもの、気まぐれなもの、偶然のものは、何一つありませんでした。聖書は、天地創造の過程において少しの偶然の余地も残していません。

第二に、これらの聖句は、それぞれの被造物がその種に従って造られたことを明確に示しています。つまり、それぞれがほかのものとは区別され、異なるように造られたということです。聖書は、地球上のすべての命に共通する自然の祖先（例えば、太古の単純細胞）について何も教えていません。

直解主義者でない人の創世記解釈からしても、これら二つの点は明らかです。天地創造の行為において偶然のものは何もなく、あらゆる種に共通する自然の祖先はありませんでした。

さて、そこで登場するのがダーウィンの進化論で、それはさまざまな形で二つのこと（偶然性とすべての種に共通する自然の祖先）を教えています。

では、なぜ多くの人は、最も基本的なレベルで創世記に反する理論のレンズを通して、創世記を解釈するのでしょうか。確かに、進化論という誤りは、無数の世俗の人々の心を奪ってきただけでなく、クリスチャンと自称する多くの人が、今述べたばかりの明らかな矛盾にもかかわらず、進化論とキリスト教信仰を調和させることができると信じているのです。

しかし、終末の諸事件との関連における進化論の隠された意味は、その惑わしの危険性を一層明らかにします。どうして一つの日、つまり第七日安息日を6日間の創造の記念日ではなく、およそ30億年（生命が地球上に初めて発生したとされている最も遅い年代）にかかった創造の記念日として、真剣に受け止められるのでしょうか。進化論は第七日から本当の重要性をはぎ取ります。なぜなら、進化論は天地創造の6日間を、〔古代ローマ建国の双子〕ロムルスとレムスが狼によって育てられたというようなただの神話にしてしまうからです。それに、創造に要したのが6日間ではなく、数十億年だと信じる人たちが、日曜日に対立するものとして、安息日を支持し迫害や死の危険を実際に冒すでしょうか。

神の三位一体の御性質という概念は、聖書の至る所に見られます。しかしヨハネの黙示録は、終末時代の惑わしと迫害との関連において、竜、海の獣、陸の獣から成る「偽の三位一体」を明らかにしています（黙13章参照）。

黙示録12:17、13:1、2を読んでください。ここでの竜は、父なる神の偽物だとみなされてきました。明らかに彼が主導権を握っているからです。竜はまた、力と王座と権威を海の獣、つまりキリストのふりをする者に与えています。なぜこの第二の権力は、偽キリストだとみなされるのでしょうか。

問4 黙示録13:2～5を読んでください。この海の獣の特徴は何ですか。

この獣は、イエスが父なる神から権能を授けられたことについて語られたことを思い出させるように（マタ28:18参照）、竜から権威を受け取るとともに、イエスと同様、死に直面し、やがて復活しました（黙13:3参照）。またこの獣は、自分の権威を（1日が1年に相当するという原則に基づいて）「四十二か月」（3年半）の間、つまりキリストの文字どおり3年半の公生涯とそっくり同じ預言的期間、行使したと記されています。

問5 黙示録13:11～17を読んでください。陸の獣は、ここでどのように描かれていますか。

この陸の獣は、聖霊が御自分にではなく、イエスに栄光をお与えになったように（ヨハ16:13、14）、海の獣に対する関心が増すような働きをします。また、聖霊が天から「火」を降らせるという力強い業をなさったように（使徒2:3）、陸の獣も似たようなことをします（黙13:13参照）。

「最後に、陸の獣は偽の五旬祭を演じる。その目的は何だろうか。この世に対して、偽の三位一体が真の神であると証明するためである」（ジョン・ポーリーン『終末時代について聖書が記していること』111ページ、英文）。

◆ 私たちが知っておくべき終末時代の惑わしには、ほかにどのようなものがありますか。ほかの人たちがそれらを惑わしだと認識するように、私たちはいかに手助けすることができますか。

終末の諸事件との関連で、とりわけ安息日の役割に関して、進化論の隠された意味についてさらにじっくり考えましょう。この理論の生みの親であるチャールズ・ダーウィンが進化論を促進した一つの理由は、(大争闘を理解せずに) 彼が悪や苦しみと、慈悲や愛情にあふれた創造主という考えに折り合いをつけられなかったことでした。この思い違いのゆえに、彼は答えを求めて別の方向を見ました。ダーウィンが進化論を修正し、改訂していた19世紀半ばから後半に、神が一つの運動、つまり(ダーウィンの理論が支持するあらゆることに反対の立場を取る) セブンスデー・アドベンチスト教会を興されたことは、偶然の一致ではありません。創造論者の基礎となるものがその名前に明示されているアドベンチスト教会が、ダーウィンの理論が成長し、広まり始めたのとほぼ時を同じくして成長し、広まり始めたというのは、なんと興味深いことでしょう。

もしダーウィンが、エレン・G・ホワイトの次の短い文章を読んで信じていたなら、この世は、天動説や自然発生説以降、思想上の最も重大なしくじりを免れていたかもしれません。「地は罪ののろいにそこなわれたとはいうものの、自然はなお人類の教科書となるべきであった。自然はもう恩恵だけを表すことはできなくなった。いたるところに悪が存在し、地も海も空気もそのけがれた手にふれて毒されている。かつては神のご品性、すなわち善の知識だけが書かれていたところに、今はそれと共にサタンの品性である悪の知識が書きしるされている。いまや善と悪の知識を表している自然から、人は、罪の結果に対する警告を絶えず受けなければならなかった」(『教育』17ページ)。

実のところ、ダーウィンが進化という推論を考案したのは、神の御性質、御品性、私たちが住む堕落した世界などに対する誤解に基づいてのことでした。残念ながら、彼の理論の隠された意味は、とりわけ終末の危機の中で、人々をサタンの惑わしの犠牲者にすることでしょう。

話し合いのための質問

- ① 多くのクリスチャンは、なぜ文字どおりのサタンという考えを受け入れないのですか。このような見解は、聖書の明瞭な教えを退けることがいかに危険であるかということについて、何を教えていますか。
- ② 臨死体験をし、この体験は、私たちが死後も生き続けることを示しているのだ、と主張する人に、あなたは何と言うことができますか。
- ③ 進化を信じる人は、なぜ終わりの時の惑わしに影響されやすいのかということに関して、あなたはほかにもどのような理由を思いつきますか。



アメリカとバビロン

暗唱 聖句

「その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。その時まで、苦難が続く／国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかし、その時には救われるであろう／お前の民、あの書に記された人々は」

(ダニエル 12：1、新共同訳)

「その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ちあがります。また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます」

(ダニエル 12：1、口語訳)

今週の 聖句

黙示録 13：1～12、14：9～11、16：2、19：20、20：4、
エレミヤ 51：6、7、53、57、黙示録 18：1～4

安息日 午後 6/2

今週のテーマ

私たちは先週、「偽の三位一体」に目を向けましたが、このサタン（竜）と地上の二つの勢力は、一緒になって神の民に迫害をもたらすでしょう。これらの勢力の一つである海の獣（黙 13：1～10）は、豹、熊、獅子の複合体（ダニエル 7：4～6 からそのまま採られた比喩）として描かれています（同 13：2）。私たちは第6課において、バビロン（獅子）、メディアとペルシア（熊）、ギリシア（豹）が興ったあと、最後の地上の権力であるローマが登場するのをダニエル7章で見ました。それは異教ローマとして始まり、やがて法王制ローマ（ダニエル 7：7、8、19～21、23～25 の小さな角）に変わりました。それは第四の獣から直接生じたものです。私たちはまた、ダニエル7章のこれらの聖句の中で描かれている法王制ローマの特徴の多くが、黙示録 13：1～10 の海の獣の中に再びあらわれているのを見ました。それゆえ聖書学者たちは、黙示録 13 章の終末の筋書きの中でローマが中心的な敵対勢力の一つであると、これまでみなしてきました。

しかし、ローマだけではありません。もう一つの勢力が描かれています。私たちは今週、黙示録 13 章とそこに描かれている諸事件や勢力にもっぱら注目します。これらの事件は何を意味し、私たちはそれにどう備えることができるのでしょうか。

問1 黙示録 13:1～10 を読み、なぜこの箇所が法王権（過去と未来におけるその役割）への言及であるのか、その理由を調べてください。特に、説明されている一つの役割が際立っていることに注目してください。それは終末の諸事件との関連において、何を意味しますか。

神はあらゆる教会の中に忠実な民を持っておられますが、聖書は、この制度が歴史の中で果たしてきた特別な役割、また終末の諸事件の中で果たすであろう特別な役割を指摘しています。

黙示録 13:3 を読んでください。何世紀にもわたって、ローマ教会は支配的な宗教であるとともに、さまざまな意味で、西洋諸国の政治的な中心でした。その権力のわかりやすい例は、法王グレゴリウス 7 世を怒らせた神聖ローマ皇帝ハインリヒ 4 世が、和解するために法王の城へ行ったという物語〔カノッサの屈辱〕の中に見られます。ローマ皇帝は、法王から入城を許されるまで、冬の寒さの中、3 日間も外庭で待たされました。自分の勝利で気を大きくしたグレゴリウス 7 世は、王たちの高慢を打ち砕くことが自分の義務である、と豪語しました。

それにもかかわらず、宗教改革、啓蒙主義、フランス革命などの影響によって、ローマの政治的、宗教的な支配権は、18 世紀の終わりまでに粉碎されました。実際、法王の 1 人ピウス 6 世は、1798 年にフランス軍によって捕らえられ、翌年、流刑中に亡くなりました。

しかし、黙示録 13 章は再起について、つまり「致命的な傷」が治ったと述べています。今日のローマは、グレゴリウス 7 世時代に振るったような政治的力は持っていませんが、最近の法王たちの人気のお陰で、宗教的にも政治的にも影響力のある勢力です（例えば、法王フランシスコが 2015 年にアメリカの上下両院合同会議で演説したのは、史上初めてのことでした）。預言によれば、この影響力は大きくなる一方でしょう。

◆ 可能な限り反感を抱かせないような形で宣べ伝えるようにと私たちが命じられているメッセージに、私たちはどうしたら忠実でいられるでしょうか。しかし、「いま持っている真理」を宣べ伝えるときに、なぜ私たちは「政治的公正」に屈してはならないのですか。

もっともなことです。人々は「どうしたらローマは、黙示録13章に描かれているような影響力を今日、あるいは将来、持つことができるのだろうか」と問ってきました。かつてのように、ローマが軍隊に命令することのできた日は、とうの昔に過ぎ去りました。が、先の問いの答えも黙示録13章の中にあります。

黙示録13:11、12を読んでください。この獣に先行する獣、つまりプロテスタント教会によってローマだと長らくみなされてきた獣は、「四十二か月の間」（黙13:5）力を与えられたと記されていました。「四十二か月の間」は、ダニエル7:25の「一時期、二時期、半時期」や黙示録12:14の「一年、その後二年、またその後半年の間」、黙示録12:6の「千二百六十日の間」と同じであり、法王の力が敵を押さえつける期間です。この（1日が1年に相当するという原則を用いている）預言の期間は、法王制の至上主義をもって西暦538年に始まり、法王が捕虜となった年の1798年に終わりました。この時、法王権は使命的な傷を受け、預言は成就しました。

「四十二か月の間」の終了（1798年）が近づいた歴史上のこの頃、もう一つの勢力が登場します（黙13:11、13:1）。今回は地中から上って来ました。それは、〔次の聖句が説明するように〕大衆の象徴である海の中から上って来たこれまでの多くの勢力とは対照的です（ダニ7:2、3、黙13:1参照）。——「あなたが見た水、あの淫婦が座っている所は、さまざまな民族、群衆、国民、言葉の違う民である」（黙17:15）。

これやあれやの理由で、この勢力はアメリカ合衆国に違いありません。アメリカは、世界の中で比較的人口の少ない場所からあらわれ、その登場のためにいずれの大帝国も打倒する必要がなかったからです。

「1798年に、新世界のどんな国が、勢力を伸ばし、将来強大な国家になる可能性を示して、世界の注目を集めていたであろうか。この象徴が、どの国に適用されるかは、実に明白である。この預言の指示するところに合致する国は、ただ1つしかない。それは、疑いもなく、アメリカ合衆国を指している」（『希望への光』1808ページ、『各時代の争闘』下巻159ページ）。

この勢力は、当初（穏やかさを象徴する）小羊のような2本の角を持っていたと描かれているものの、いつしか「竜のように」（黙13:11）ものを言うようになります。それは、先の勢力の下で起きたような迫害の時代を示しています。こうして次に、黙示録13:11～17は、どうしたらローマが預言の告げる影響力を振ることができるとかという疑問に答えます。ローマは、アメリカ合衆国の力を背後に持つことになるのです。そういうわけなのです。

聖書に記された歴史を通じてずっと、主は偶像礼拝やほかの形の偽りの礼拝に陥った人々に絶えず対応なさらねばなりませんでした（マタ 4:8～10 参照）。黙示録 13 章に描かれている終末の危機において、礼拝の問題が再び浮上します。ここにおいても神の民は、だれを礼拝し、だれに仕えるかに関して、選択をしなければならなくなるでしょう（ヨシュ 24:15 参照）。

「ダニエルと終末時代」と題した第 2 課で、私たちは「金の像（を）拝め」（ダニ 3:5）と命令された 3 人のユダヤ人青年の物語を研究しました。私たちはまた、神の民が終わりの時に遭遇するであろう迫害を描くために、ダニエル 3 章の言葉が黙示録 13 章でいかに使われているかも見ました。つまり私たちは、ダニエル 3 章で起こったことを、（黙示録 13 章で獣の勢力という背景の中で描かれているように、）終わりの時に起きるであろうことの先駆けと見なすことができるかもしれません。すべての人が金の像を拝むように命じられ、さもなければ彼らは燃え盛る炉に投げ込まれて殺されたのです。同様に黙示録 13 章では、「獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた」（黙 13:15）とあります。

黙示録 14:9～11、16:2、19:20、20:4 を読んでください。礼拝の問題が重要になることに関して述べられています。バビロンは、常に偽りの礼拝の中心地でした。バベルの塔は、ルシファーのように、「雲の頂に登って／いと高き者のようになろう」（イザ 14:14）という建設者たちの強い願望とともに、地球規模の大洪水が起きた際に彼ら自身を救おうとする努力を証明していました。そのようにして彼らは、二度と洪水で地球を滅ぼさないという神の約束を信じることを拒絶したのです（創 9:8～11）。

同様に、新しいバビロン帝国は人間の手による働きを称賛します。ネブカドネツアルは、「なんとバビロンは偉大ではないか。これこそ、このわたしが都として建て……（た）ものだ」（ダニ 4:27 [口語訳 4:30]）と自画自賛しました。のちにベルシャツアル王は、宴会のためにソロモンの神殿から金銀の器を取って来て、「酒を飲みながら、彼らは金や銀、青銅、鉄、木や石などで造った神々をほめたたえ」（同 5:4）しました。神殿の本物の器が、人を酔わせるぶどう酒で満たされ、その器から酒を飲んだすべての人の感覚を麻痺させたことに注目してください。結果としてバビロンが倒れたとき、その町にいた多くの人が滅びました。外見が真理であるものが、致命的な「バビロンのぶどう酒」を偽装することによって、私たちを惑わしうるのです。偽りの礼拝や偽りの考えは、サタンの王国の特徴です。

◆ どうしたらいかなる偽りの礼拝にも巻き込まれないようにすることができるでしょうか。

バビロンについて教えている次の聖句を読んでください（エレ51:6、7、53、57、ゼカ2:11、黙17:5、6、18:2、3）。きのう触れたように、バビロンは偽りの礼拝の中心地として長い歴史を持っています。ですから、人々を惑わす終末の勢力にふさわしい象徴なのです。

竜、海の獣、赤い獣を比較してください（黙12:3、13:1～3、17:3）。これら三つの獣は七つの頭と10本の角を持っており、それはダニエル7章の獣たちの頭と角を合計した数です。代々の帝国は、先行する国の上に築かれました。同様に赤い獣は、（異教ローマと法王制ローマをそれぞれ象徴している）竜や海の獣とともに、陸の獣（黙13:11～14）の要素を併せ持ち、「（すべて神の敵である）三つの勢力を現実の同盟」（ジャック・B・ドゥカーン『黙示録の秘密——ユダヤ人の目を通して見た黙示録』162ページ、英文）にまとめています。黙示録17章で追加されている要素は赤い獣にまたがっている女で、それは、宗教的権力と政治的権力の野合を象徴しています。この女は黙示録12章の清い女とは、まったく対比的です。

清い女（黙12章）	大淫婦（黙17章）
天において 身に太陽をまとっている 12の星の冠をかぶっている 竜に攻撃される 残りの者たちの母	水の上において 紫と赤の衣を着ている 金と宝石と真珠で身を飾っている 竜に支援されている みだらな女たちの母

「みだらな女たちの母」として、バビロンは精力的に自己増殖してきました。背教の母なる教会は、多くの背教の娘たちを持っています。しかし、背教のキリスト教によって広められた過ちやなされた残虐行為を、神はお認めになりません。神の真の民はサタンに攻撃されますが、何世紀にもわたって生き残ります。

黙示録14:8は、バビロンが倒れること、つまり真理からの背教をすでに人々に警告していました。その背教が最終的に、結果として獣の刻印となる最後の惑わしをもたらします（黙14:9～11）。この警告は、はるかに力強く繰り返されるでしょう。そしてそれが、バビロンに残っている神の民に対して、そこを離れ去り、終末時代の神の残りの教会と一緒にいなさい、という最後の訴えになるのです（同18:1～4）。

長年にわたって、聖書の預言の研究者たちは世界中の出来事を、とりわけ終末に関係すると思われる出来事を興味深く見守ってきました。例えば、アメリカ合衆国の役割について考えてみてください。さかのぼること1851年に、何人かのアドベンチストは、アメリカを第二の獣の勢力（黙13:11～15）とみなしていました。当時の合衆国の地位を考えるなら、それは非常に見事な同定でした。19世紀の中頃、大国は依然として旧世界の国々（プロイセン、フランス、オーストリア・ハンガリー、イギリスなど）だったからです。当時、アメリカが平時に持っていた軍隊は2000人ほどで、それはワートルローの戦い（1815年）だけ見ても、その戦闘員数の約十分の一にすぎませんでした。ほんの40年ほど前の1814年には、イギリスが侵攻してワシントンDCを焼き払い、1867年には、ラコスタ・スー族の酋長シッティング・ブルの戦士たちがカスター將軍の第七騎兵隊を全滅させました。このように、ある聖書注釈者たちがアメリカ合衆国を、いつの日か「獣の刻印」をこの世に強要する勢力とみなしたあとでさえ、この国はまだ自分の領土で先住民と戦っており、しかも常勝ではありませんでした。

疑いなく、世界中の出来事は、私たちがそうなると信じてきたとおりの道をたどっています。しかし、私たちが終わりに至るまでに、明らかになるべき事柄はまだあります。それゆえ、例えば「獣の刻印」について語る際に、今現在、（第四条を守っているかいないかにかかわらず）だれにもその刻印が押されていないということを強調するのは、とても重要です。このほかにも、多くのことが明らかになります。

黙示録18:1～4を読んでください。これらの聖句は、政治的に、道徳的に、靈的に殺伐としたこの世の実態を描いています。この世における、偽りの宗教の教えの有害な影響力を示しているのです。しかしその一方で、大きな希望も与えています。なぜなら、天から降って来たもう1人の天使が栄光で地上を輝かすからです。さらに、神の忠実な民、知るべきことをまだ学んでいなかった人たちが、バビロンから離れ去るようにと召されます。つまり、最後の最後まで、すでにバビロンを出た神の民には、まだ中に残っている人たちのためになすべき働きがあるということです。

◆ まだバビロンの中にいる人たちを「わたしの民よ」と主が呼んでおられることは、私たちにとってどんな意味を持つべきですか。私たちがほかの人と関わるときに、なぜこのことは覚えておくべき重要な点なのか。

神の律法に対するサタンの攻撃は、神御自身への攻撃、つまり神の権威と統治の両方に対する攻撃です。それゆえ終わりの時に、終末の危機のクライマックスとなる諸事件の中で、サタンは「神の掟」（黙12:17、14:12）を守る者たちを攻撃するでしょう。なぜなら、地上で彼らだけがサタンの代理人たちを通してサタンに敬意を払わないからです。昔、サタンが天で神に仕掛けた戦いは、この地上で継続され、彼は天で負けたように、地上でも敗北します。

「天における大争闘のその最初から、神の律法を覆すことがサタンの目的であった。彼が創造主に対する反逆を始めたのは、この目的を達成するためであった。そしてサタンは、天から追放されたけれども、この地上で同じ戦いを続けてきた。人を欺き、それによって神の律法を犯すようにさせることこそ、サタンが着々と追い求めてきた目的である。このことは、律法全体を廃することによって成し遂げられても、あるいはまた、戒めの1つを拒むことによって成し遂げられても、最終的な結果は同じである。『その1つの点』でも犯す者は、律法全体に対する軽べつをあらわすのであり、その影響と手本は罪に味方するものであって、『全体を犯したことになる』のである（ヤコブ2:10）」（『希望への光』1882ページ、『各時代の大争闘』下巻343ページ）。

話し合いのための質問

- ① 安息日学校のクラスで、世界の諸事件と、終わりの時に起こると私たちが信じていることをそれらの事件がいかに関与しているかについて、話し合ってください。どのような事件がまだ起こる必要がありますか。熱狂主義、日付の設定、聖書や証の書が明確に教えていないことについて大胆な予想を立てることなどを避けつつ、どうしたら私たちは時のしるしに気を配り続けることができるようになるのでしょうか。
- ② 礼拝に関する問題について、さらにじっくり考えてみてください。何かを拝むというのは、どういうことでしょうか。私たちが礼拝するものが何であれ、私たちはどのように礼拝すればよいのでしょうか。
- ③ 神がバビロンの中に依然として民を持っておられるということについて、さらにじっくり考えてみてください。（明らかに象徴であって、文字どおりのものではない）「バビロン」という言葉の意味を、私たちはどのように理解していますか。そのことは、人々の政治的、宗教的信条にかかわらず、彼らに私たちのメッセージを宣べ伝え続けなければならないことについて、何を教えていますか。



神の刻印か、獣の刻印か

暗唱 聖句

「彼らは、神の僕モーセしもべの歌と小羊の歌とをうたった。『全能者である神、主よ、あなたの業は偉大で、驚くべきもの。諸国の民の王よ、あなたの道は正しく、また、真実なもの』」

(黙示録 15：3、新共同訳)

「彼らは、神の僕モーセしもべの歌と小羊の歌とを歌って言った、『全能者にして主なる神よ。あなたのみわざは、大いなる、また驚くべきものであります。万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります』」

(黙示録 15：3、口語訳)

今週の 聖句

創世記 17：9～11、出エジプト記 31：13、17、黙示録 13：17、エフェソ 1：13、14、ヘブライ 4：9、10

安息日 午後 6/9

今週のテーマ

モーセと小羊の歌は、今週の暗唱聖句の言葉で始まっています。その歌は、「獣に勝ち、その像に勝ち、またその名の数字に勝った者たち」(黙 15：2) が天のガラスの海の岸に立つときに歌うものです。どうしたら私たちもその中にいることができるのでしょうか。

終わりの時の神の真の民をあらわす顕著なしるしの一つは、彼らが第三天使の使命を宣べ伝えることであり、そのメッセージは獣の刻印を受けることへの警告です。これ以上に重大な警告は聖書のどこにもないにもかかわらず、この刻印が何であるかということに関して、多くの混乱するような考えが、長年にわたって提案され続けてきました。額のバーコードだとか、クレジット・カードの番号だとか、何らかの生体認証だとかいった考えです。

私たちは、混乱するような考えがバビロンで蔓延まんえんすることに驚くべきではありません。何しろ、バビロンという名は「混乱」を意味するのですから……。しかし、神の残りの民は、第三天使の使命を力強く宣べ伝えるために、この問題をはっきり理解する必要があります。私たちは今週、獣の刻印とは何であり、(神の刻印を受けることによって) いかにかそれを避けるかということに関して、理解を深めたいと思います。

問1 旧約聖書時代、神の真の民を特定するものとして二つの外面的なしるしがありました。その一つが割礼でした。このしるしは、だれに初めて与えられましたか（創17：9～11）。

神はアブラハムとその子孫に、救済の契約のしるしとして割礼をするようにと命じられました。男児は生後8日目に割礼を施されねばなりません（レビ12：3）。しかしこの儀式には、より深い意味がありました。それは心の割礼、つまり心の刷新の必要を象徴するように意図されていたのです（申30：6参照）。だからパウロは、「外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、肉に施された外見上の割礼が割礼ではありません。内面がユダヤ人である者こそユダヤ人であり、文字ではなく“霊”によって心に施された割礼こそ割礼なのです。その誉れは人からではなく、神から来るのです」（ロマ2：28、29）と書いています。

Iコリント7：19、ガラテヤ5：6、6：15などの聖句は、新約聖書において、割礼がバプテスマに取って代わられたことを示しています。バプテスマは、回心、「新しく創造されること」、罪に死に、新しい命に復活することを象徴しているのです（ロマ6：3、4）。それゆえパウロは、割礼はもはや重要ではない、本当に大切なのは「愛の実践を伴う信仰」と「神の掟を守ること」だ、と言います。

問2 神が御自分の民を特定するために与えられた第二の外面的なしるしは、何でしたか（出31：13、17）。それはなぜ与えられたのですか（エゼ20：12、20）。

割礼はアブラハムから始まったにすぎませんが、しるしとしての安息日は、天地創造にまでさかのぼることに注意してください（創2：2、3も参照）。それゆえイエスは、創世記に言及しつつ、「安息日は、人のために定められた」（マコ2：27）とおっしゃいました。安息日は、私たちが創造と贖いによって神のものであることを示しています。なぜなら、神は私たちが創造するとともに、私たちが義なる者とし、清めてくださるからです。それゆえパウロは、割礼はもはや重要でないと言いますが、（安息日を含む）神の掟を守るとは、依然として重要であると主張しています（ヘブ4：9参照）。

◆ あなたの考えや動機は、あなたが心に割礼を受けたかをいかに明らかにしていますか。

問3 次の聖句を読んでください（黙13：17、14：9、10、16：2）。これらの聖句は、「獣の刻印」を避けることがいかに重要であるかについて、どのようなことを教えていますか。

混ぜものなしの神の怒りを受け、最後の七つの災いで罰せられ、最終的に火の海に投げ込まれる……。獣の刻印を拒絶し、ガラスの海の岸に立って誇らしげに神と小羊をほめ歌う人たちと、なんと対照的なことでしょう！

だれもが押されたくないこの刻印とは、いったい何でしょうか。明らかに、先の聖句はそれを偽りの礼拝と結びつけています。先の課で触れたように、ダニエル7章の第四の獣の勢力は、その後半の段階において（黙示録13章の海の獣によっても描かれているように）、「時と法を変えようとたくらむ」（ダニ7：25）のです。その勢力が変えようと考えた一つの律法が、十戒の第四条、安息日でした。その戒めは、十戒の中で唯一時間に関係しており、また神を、「天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれた」（出20：11）お方として直接指し示しています。

重要なことに、第一天使の使命は、獣の勢力が変えようとしたこの掟を私たちに指し示し、私たちが主だけを創造主として礼拝すべきであることを明らかにしています。実際、黙示録12章から14章において礼拝に言及している七つの聖句の中で、これ（黙14：7）だけが真の礼拝に関するもので、ほかの六つは、獣とその像を拝む偽りの礼拝を警告するものです（同13：4、8、12、15、14：9、11）。第三天使が、この偽りの礼拝に携わる者たちの運命について述べた直後に、神の真の礼拝者たちは、「ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要である」（同14：12）と説明されています。

言い換えれば、これら三つのメッセージを宣べ伝えることで、すべての人間が二つのグループに分けられます。（第七日安息日の掟を含む）神の掟をすべて守ることによって創造主を拝む人たちと、獣とその像を拝む人たちです。やがてこの偽りの礼拝形式は、安息日の掟を守ることで創造主を拝むことに代わるものを提供します。

◆ 礼拝と忠誠の関係について考えてください。神に対する私たちの忠誠を示すために、礼拝のどういう側面が不可欠ですか。

刻印は、サインと同様、書類の正当性を立証するために使われます。古代においてそれは、真正性や所有権を示すために柔らかい蠟や粘土に押された印であり、その印の背後には所有者の権威（権限）がありました。

問4 神の刻印とは何ですか。それはいつ、どのように押されるのですか（エフェ 1：13、14、4：30、Ⅱテモ 2：19、黙 7：1～4、14：1）。

神の刻印は、神の民に対する神の所有権と保護のしるしです。パウロは刻印を押すことを、回心と聖霊の賜物を受けることとのつながりで説明しています。彼はこの賜物を、イエスが来られるときにすべての信じる人が受け取る未来の財産と完全な贖いの保証として彼らに与えられる「手付金」、「頭金」と呼んでいます。

ヨハネの黙示録は、再臨の直前に押されるもう一つの刻印を描写しています。この最後の刻印は、後の雨が降り注ぐときに14万4000人に押されるものです。彼らの額には神の名前（あるいはサイン）が記されています。彼らは、彼らの生活の中における聖霊の働きによって、神の御品性を反映するようになります。

問5 神の刻印と獣の刻印を比較してください（黙 7：3、14：9）。両者の違いは何だと述べられていますか。

神の刻印は神の真の礼拝者に押され、獣の刻印は獣の礼拝者に押されます。神の刻印は額にだけ押され、そのことは、神がお命じになったとおりに神を礼拝しようとする明確な知的選択を示しています。一方、獣の刻印は額か手に押されます。これは、人々が二つの理由のいずれかのために獣を礼拝するということです。彼らは頭の中で、自分が本当に神を礼拝していると思って獣に同意するか、あるいは、獣に同意はしないものの、従わない場合の深刻な結果を恐れるがゆえに賛成します。その深刻な結果とは、物を買うことも売ることもできず、最終的に殺されることです（黙 13：17：15）。

「この世と結びついている者たちは、この世的な性質になり、獣の刻印を押される準備をしつつある。自己を信じることなく、神の前に自分を低くし、真理に従うことで魂を清めつつある者たちは、天の性質になり、神の刻印を額に押される準備をしているのである」（『教会への証』第5巻216ページ、英文）。

私たちが押されないようにすべきこの獣の刻印とは、何でしょうか。先の課で触れたように、ダニエル7章の第四の獣の勢力は、その後半の段階において（黙示録13章の海の獣によっても描かれているように）、「時と法を変えようとたくらむ」（ダニ7：25）のです。その勢力が変えようとたくらんだ一つの律法が、十戒の第四条、安息日でした。その戒めだけが神を、「天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれた」（出20：11）お方として直接指し示しています。

その一方で、第一天使の使命は、獣の勢力が変えようとしているこの掟を読者に指し示し、私たちが主だけを創造主として礼拝すべきであることを明らかにしています。続いて、「獣とその像」（黙14：9）を拝む人たちの運命についての警告のあと、神の忠実な民が黙示録14：12で描かれています。

問6 黙示録14：12を読んでください。背景を考えると、神の忠実な民に関するこの説明は、なぜ安息日が終末の諸事件にとって中心となるかを理解するうえで、いかに助けとなりますか。

黙示録14：12には、「ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要である」と書かれています。すでに触れたように、「神の掟」には、創造主なる神、礼拝されるべき唯一のお方を指し示す第四条（安息日）が含まれています。それゆえ、多くの人が「獣の刻印」の問題を日曜礼拝の問題と直接関係しているとみなすのも不思議ではありません。日曜礼拝は、聖書の中に命じられている第四条を守ることとは対照的に、聖書で命じられていない偽の「安息日」を守ることだからです。

これは、日曜日に神を礼拝するクリスチャンたちが、今、獣の刻印を受けているという意味なのでしょうか。いいえ、そうではありません。黙示録13：15によれば、獣を拝む偽りの礼拝に参加することを拒んだ者たちは殺されます。それは、最終的に生きるか死ぬかの問題になるのです。しかし明らかに、諸事件はその段階にまだ至っていません。獣の刻印は、このような最終試験がなされるまでは押されないでしょう。ですから、だれ1人として、まだ獣の刻印を受けていません。

◆ 「神の掟」「イエスに対する信仰」——これらの特徴は、現在でも、なぜ真のクリスチャンであることの重要な側面なのですか。

すでに触れたように、第七日安息日は、アダムとエバに始まり、イスラエルの時代にも続き、歴史を通じてずっと神の真の民のしるしでした。また私たちは、新約聖書の教会においても、イエスや使徒たちの順守によって安息日が存続しているのを見ますし、それが「神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける」（黙示 14:12）終末時代の神の民の際立ったしるしだとみなしています。

問7 なぜ安息日は重要なのですか（出 20:8～11）。安息日はクリスチャンにとって、どんな特別な意味を持っているのですか（ヘブ 4:9、10）。

安息日は、十戒の真ん中に登場します。安息日は創造主によって、主の權威のしるし、刻印として与えられました。安息日は、「あなたの神、主」という名前によって、創造主を特定します。また安息日は、創造主が支配権を持っておられる領域、つまり「天と地と海とそこにあるすべてのもの」を特定するとともに、その權威の根拠、つまり「六日の間に主は天と地……を造り、七日目に休まれた」ことを特定しているのです。

新約聖書は、神がイエスによって万物を創造されたと認めています（ヨハ 1:1～3、コロ 1:16、ヘブ 1:1、2）。私たちの世界を6日間で創造し、7日目に休まれたのはイエスです。それゆえ、イエスが金曜日の午後十字架にかけられたとき、「成し遂げられた」（ヨハ 19:30）と叫ばれたことは極めて重要です。イエスは、天地創造の業を終えられたあと、安息日に休まれたように、私たちの贖いのために私たちに代わって死ぬことで犠牲の働きを成し遂げられたあと、安息日を墓の中で休まれました。ですから、安息日は二重に祝福されています。最初は天地創造において、次には十字架において。それゆえヘブライ人への手紙によれば、クリスチャンは安息日に休むことで、「神が御業を終えて休まれたように、自分の業を終えて休んだ」（ヘブ 4:10）ことを示すのです。安息日は、私たちが自分自身を救えないということ、最初から最後まで、救いは信仰によって可能となるキリストの働きであるという事実の完璧な象徴なのです（ヘブ 12:2 と比較）。

◆ 安息日が自分の仕事をやめて休むことを象徴するのなら、日曜日順守は何をあらわしているのでしょうか。それはいかに、バビロンの基本的特徴にぴったり当てはまりますか。

「神の民が額に刻印——それは目に見える印やしるしではなく、知的かつ霊的に真理に慣れ親しむことであり、それゆえに消し去られない——を押されるとすぐに、すなわち神の民に刻印が押され、ふるいの備えができるとすぐに、それはやって来るだろう。確かに、ふるいはすでに始まっている。神の裁きは今や大地に臨んでいるので……私たちはどのようなことが起きるのかを知ることができる」(『私を生かす信仰』288ページ、英文)

「安息日は、特に論争点となっている真理であるから、忠誠の大試金石となる。最後の試練が人々を襲う時、神に仕える者と神に仕えない者の区別が明らかになる。第4条の戒めに反して、国家の法律に従って偽りの安息日を守ることは、神に敵対する権力に忠誠を尽くすという表明であり、一方、神の戒めに従って真の安息日を守ることは、創造主に対する忠誠の証拠である。一方は、地上の権力に服従するしるしを受け入れることによって、獣の刻印を受け、他方は、神の権威に対する忠誠のしるしを選んで、神の印を受けるのである」(『希望への光』1893、1894ページ、『各時代の争闘』下巻375ページ)。

話し合いのための質問

- ① 不必要な論争を引き起こさないどのような方法で、私たちは獣の刻印と神の刻印についての真理を人々に語ることができますか。例えば、私たちは、現時点でだれも獣の刻印を押されていないという事実を、なぜ強調しなければならないのですか。
- ② 安息日と聖霊が刻印を押すこととは、どのように関係していますか。
- ③ 上記の刻印というものを「知的かつ霊的に真理に慣れ親しむこと」としてじっくり考えてください。それはどういう意味ですか。
- ④ 霊的バビロンとその価値観、その方法の特徴づけるものは何か、話し合ってください。それらは神の国の価値観とどのように異なりますか。バビロンの価値観のあるものは、現時点でも、私たちの教会の中に入込みうるのでしょうか。どうしたら私たちは、それらが何であるかを認識し、神の国の価値観を反映したクリスチャンらしい方法で、対処することができるでしょうか。



バビロンと最後の戦い

暗唱 聖句

「その額には、秘められた意味の名が記されていたが、それは、『大バビロン、みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母』という名である」
(黙示録 17：5、新共同訳)

「その額には、一つの名がしるされていた。それは奥義であって、『大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべきものらの母』というのであった」
(黙示録 17：5、口語訳)

今週の 聖句

黙示録 14：8、16：19、イザヤ 52：9、黙示録 18：1～10、
黙示録 16：12～16、列王記上 18：1～40、Iコリント 15：1、2

安息日 午後 6/16

今週のテーマ

すでに述べたように、ヨハネの黙示録は、旧約聖書からそのまま採られた象徴や言葉であふれています。例えば、バビロンという名前は黙示録の中に6回登場しますが、それは、何百年も前に世界史から消え去ったネブカドネツアル王の古代の王国のことではありません。そうではなく、ヨハネは真理を表現するために旧約聖書の^{ひよ}比喻を用いていたのです。この場合、バビロン（神の民を抑圧した巨大な政治的かつ宗教的な勢力）は、終わりの時に同じことをしようとする巨大な宗教的かつ政治的諸勢力をあらわしています。

同様のことが「ハルマゲドン」という言葉にも言えます。この言葉は黙示録の中にしか登場しませんが、「メギドの山」を意味すると思われるヘブライ語句に基づいており、その山は古代イスラエルのある場所を指します。ハルマゲドンに関しては非常に多くの推測が存在しており、多くの人が、この世の終わり近くにメギドのそこで激しい戦闘が起こると予想しています。

私たちは今週、バビロンとハルマゲドンに目を向け、聖書がこれらの象徴を用いて述べていることを学びます。

問1 ヨハネの黙示録の中でバビロンに言及している次の六つの聖句を読んでください（黙14：8、16：19、17：5、18：2、10、21）。旧約聖書に登場したバビロンの物語を心に留めるとき、これらの聖句は、終末の諸事件との関連で登場するバビロンについて、どのようなことを教えていますか。

聖書は二つの町、エルサレムとバビロンの物語だ、と言われてきました。エルサレムが、神と（聖書全体を通じての）神の契約の民の町をあらわす一方（詩編102：22[口語訳102：23]、イザ52：9、65：19、黙3：12）、バビロンは、抑圧、暴力、偽りの宗教、神に対するあからさまな反逆をあらわしてきました。

例えば、バベルの塔を考えてみてください（創11：9）。「バベル」に相当するヘブライ語は、王国の「バビロン」と同じ言葉です。Iペトロ5：13において、ペトロは「バビロン」の教会から挨拶を送っていますが、それは、現代のイラクにあった古代の王国の遺跡からという意味ではなく、間もなく教会の迫害者となるはずのローマからだとして一般に理解されています。ヨハネの黙示録とその中に示されているローマの役割を踏まえると、それは興味深い呼称です。

問2 黙示録14：8と18：3を読んでください。これらの聖句は、この世と神の民に対するバビロンの悪影響について、どんなことを明らかにしていますか。

ヨハネの黙示録の中で描かれているように、バビロンに代表される権力が、程度の差こそあれ、世界中に及ぶ腐敗させる影響力を持ち、非常に墮落していることは、疑いの余地がありません。「怒りを招くみだらな行いのぶどう酒」（黙14：8）という言葉は、偽りの教理、偽りの教え、墮落した習慣、そしてそれらからもたらされる最終結果を明らかに指しています。バビロンは、「すべての国の民」（黙18：3）に悪を広めてきた力です。それゆえすべての人は、自分が墮落しないように用心しなければなりません。

◆ 今日の世界を見回すと、腐敗、混乱、抑圧があります。私たちはこのことから、イエスと御言葉にいかりをいかりを下ろす必要について、何を学ぶ必要がありますか。

この世におけるバビロンの影響力が、どれほど腐敗しており、どれほど広範囲に及んでいようと、ヨハネの黙示録は、いつの日かそれが終わると教えています。

黙示録 18:1～10 を読んでください。この聖句は「大バビロン」について教えています。バビロンが倒れることに関する第二天使のメッセージ（黙 14:8）は、黙示録 18:2 において繰り返されています。それは、この存在がいかに墮落したかを表現しています。

「聖書は、主の再臨の前に、サタンが『あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、また、あらゆる不義の惑わしとを』をもって働き、『自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれ』ない者は、『偽りを信じるように、迷わす力』を受けるに至る、と言っている（Ⅱテサロニケ 2:9～11）。こうした状態になって、教会と世俗との結合がキリスト教国全体において完全に行われる時に、初めてバビロンの墮落は完全なものとなる。この変化は徐々に行われる。黙示録 14:8 の全面的成就是、まだ将来のことである」（『希望への光』1783 ページ、『各時代の大争闘』下巻 92 ページ）。

「全面的成就」が今や果たされたのかどうかは、神にしかわかりません。しかし私たちにも、先の聖句によれば、霊的バビロンが自身の大いなる悪のゆえにいつの日か神の裁きを受けるとことはわかります。「彼女の罪は積み重なって天にまで届き、神はその不義を覚えておられるからである」（黙 18:5）。この表現は、古代バビロンに関する旧約聖書の言葉を反映しており（エレ 51:9 参照）、裁きの時が必ずやって来ることを意味します。

言うまでもなく、このような裁きがやって来ることは、驚くに当たりません。何しろ、古代のバビロンも裁きを受けたのですから……（ダニ 5 章参照）。聖書は多くの箇所、バビロンを含むすべての人が、いつの日か自らの行為の釈明をしなければなくなるだろう、とはつきり述べています。私たちクリスチャンには、その裁きにおいて味方になってくださる弁護者がいますが（Ⅰヨハ 2:1、ダニ 7:22）、そのことを知っているのはなんと心強いことでしょう。さもなければ、私たちの運命は、バビロンの運命とさせて頂かないかもしれません。

◆ 現在、罰を免れているように思える不正や不義が、いつの日かすべて、神によって最終的報復を受けるという約束の中に、あなたはいかに慰めを見いだすことができますか。

多くのクリスチャンを含むたいの人は、ヨハネの黙示録をよく知りませんが、黙示録の中の一つの象徴（あるいは、言葉）だけは、大衆文化の域に達しています。それが「ハルマゲドン」（黙16:16）です。世俗文化の中においてさえ、この言葉は、地球の運命がかかっている最後の戦いを象徴するようになりました。ハリウッドは、地球に衝突しようとしている巨大な小惑星についての映画『ハルマゲドン』を製作しました。ある程度、世界の終わりという考えは、世俗の人々の頭の中にもあるのです。

黙示録をよく知り、それを信じている多くのクリスチャンは、ハルマゲドンの戦いを、この世の終わり間近の中東における文字どおりの軍事衝突だとみなしています。一説によれば、2億人の軍隊がアジアから北イスラエルに侵攻するといひます。ほかの説は、世界のその地域におけるさまざまな軍事的、政治的衝突にこたわっており、それらの説の解釈によれば、こういった衝突がメギド周辺でのハルマゲドンという最終戦闘のお膳立てをするといひのです。

しかし、聖書はまったく異なる描写をしています。聖書はハルマゲドンを、小競り合いをする国家間の最終的クライマックスではなく、宇宙規模の戦いの両陣営の最終的クライマックスとして描いているのです。それは宗教的争いであって、どれほど経済的、政治的な要素が関係するとしても、経済的争いや政治的争いではありません。

ハルマゲドンについて黙示録16:12～16を読んでください。まず、ここでの言葉がいかに象徴的であるかに注目してください。竜の口、獣の口、偽預言者の口から出てくる蛙のような三つの霊（黙示録13章の諸勢力への言及です。ここでの「偽預言者」は、黙示録13:11の陸の獣を指しているに違いありません）……。「悪霊どもの霊」（黙16:14）が「全能者である神の大いなる日の戦い」（同）に出て行くとおるように、ここでも大争闘が見られます。どのような形でハルマゲドンが繰り広げられるにしても、それはキリストの勢力とサタンの勢力との世界的規模の紛争です。それは、黙示録のバビロンが現代のイラクの片隅での出来事について述べていないように、メギド周辺の地域紛争ではありません。

◆ 黙示録16:15を読んでください。これらの出来事のさなかにあつて、イエスが私たちに福音のメッセージで（再臨の約束と彼の義で覆われることの必要性とで）励ましておられるのは、なんと興味深いことでしょう。このことは、私たちが巻き込まれている戦いの霊的性質を理解するうえで、いかに助けとなりますか。

それにしても、このハルマゲドンの大いなる戦いとは何でしょうか。第一に、この名前は「メギドの山」を意味しているようです。ただし、メギドとして知られる地域には山がありません。ところが、カルメル山がこの近くにあり、学者たちは、「メギドの山」という言葉がカルメル山を指しているとみなしてきました。

より端的に言えば、聖書の研究者たちは、カルメル山におけるエリヤとバアルの偽預言者たちとの物語を、黙示録13章で起きようとしていることの象徴、予型であると、これまでみなしてきたのです。

きのう触れたように、竜、獣、偽預言者に言及している黙示録16:13は、黙示録13章の諸事件（第9課で見た偽の三位一体）を指し示しています。

黙示録13章における問題は、13節、14節で山場を迎え始めるのですが、その時、第二の獣は超自然的な行為を行い、「人々の前で天から地上へ火を降らせ」（黙13:13）さえます。やがてこれらの出来事は、神とサタン、真の神を拝む者たちと「獣の像」（黙13:14）を拝む者たちとの間に、直接的な衝突を引き起こします。

問3 列王記上18:1～18を読んでください。ヨハネの黙示録で見られるように、終末の諸事件の中で明らかになる問題のいくつかを反映するどんなことが、この物語の中で起きていますか。

いろいろな意味で、私たちがここに見るのは、大争闘のありのままの描写です。エリヤは列王記上18:18で、その問題をとても簡潔に述べています。「〔人々は〕主の戒めを捨て、バアル〔偽の神々〕に従っている」。歴史を通じて、この悪は数えきれない形や方法であらわれましたが、問題は常にこのことだったのではないのでしょうか。私たちは、「天と地、海と水の源を創造した方」（黙14:7）を拝んでいるか、さもなければ、何かほかの人や物を拝んでいるのです。黙示録13章の状況とそこで繰り広げられている諸事件の中で、人々は主を拝む代わりに、獣とその像を拝んでいます。中立の立場はありません。私たちは神の側か、サタンの側か、いずれかにいます。そういうわけで、争点であるこの問題は、現在、またとりわけハルマゲドンの戦いにおいて重要です。その戦いでは、私たちがカルメル山上の物語で見るように、明確に区別されるからです。

列王記上 18:18～40 を読んでください。この物語は、大争闘が最終時代に山場を迎えるときに起きることを反映しています。カルメル山上の戦いは、神の預言者エリヤと450人のバアルの預言者との間の戦いでした（いかに悪人が善人よりも数で勝っていたかに注目してください）。それは、だれが真の神であるか——天と地を創造された神か、それとも「竜」（黙 12:9）のもう一つのあらわれであり、竜がこの世を惑わすためのもう一つ的手段にすぎないバアルか——を明らかにするテストでした。

バアルの預言者たちはバアルに、火を送って彼らの雄牛のいけにえを焼き尽くすようにと祈りました。彼らは朝から昼まで叫びました。「大声で呼ぶがいい。バアルは……恐らく眠ってい（る）……のだろう」（王上 18:27）と、エリヤはからかいました。バアルの預言者たちは狂乱状態になり、剣で自分の体を切り、血を流すまでに至ります。こうして疲労困憊した彼らは、夕方の犠牲をささげる時刻にあきらめました。

エリヤのいけにえは水を三度かけられ、祭壇の周りの溝には水があふれました。彼は単純な祈りを神にささげました。すると神は、石の祭壇やその下の土も含めて、すべてをたちまち焼き尽くされたのです。バアルとは対照的な真の神の力が、今や明らかでした。

問4 黙示録 16:13、19:20、21 を読み、これら三つの聖句をバアルの偽預言者たちの運命と比較してください。私たちはここに何をみますか。

ハルマゲドンについてわからないことが残るとしても、私たちは今、少なくともその結果を知っています。神の敵は滅ぼされ、神と神の聖なる者たちは正当性を立証されるのです。

◆ I コリント 15:1、2 を読んでください。ハルマゲドンとは背景が異なりますが、パウロはどのようなことを訴えていますか。なぜそれは、（とりわけ将来待ち受けていることに照らして考えると、）私たちが覚える意味のあることなのでしょう。黙示録 16:15 も読んでください。その背景は、間違いなくハルマゲドンです。これらの聖句はともに、どういうことを私たちに教えていますか。

「ハルマゲドンの戦いに関する物語のところで、恐ろしい生き物や醜い出来事が、しばしの間、後ろ舞台に引き下がり、より個人的な真理が垣間見られる。すでに触れたように、その一つが黙示録 16:15 である。『見よ、わたしは盗人のように来る。裸で歩くのを見られて恥をかかないように、目を覚まし、衣を身に着けている人は幸いである』。この聖句は、実際にハルマゲドンという名前が出てくる聖書の中の唯一の箇所、真ん中に登場しており、イエスの再臨と終末の諸事件への個人的備えに関する新約聖書の多くの箇所と同じことを述べている。

もう一つのそのような聖句が黙示録 17:14 である。『この者たちは小羊と戦うが、小羊は彼らに勝つだろう。なぜなら、小羊は主の主、王の王であり、彼とともにいる者たちは、召され、選ばれた忠実な者たちだからである』(著者の私訳)。ここで終末の大戦争に参加するのは、武器で相手を滅ぼすことを第一の目的とした人々の軍隊ではなく、神の召しと選びに忠実であることを第一の目的とした人々の軍隊である。これは、国と反乱軍が戦うような戦争とは異なる種類の戦争なのである。私が繰り返し述べてきたように、ハルマゲドンの戦いとは、精神をめぐる戦いなのだ。それはまた、殺された小羊に対する心からの忠誠を求める召し(黙 5:9、10、12、13:8)、つまり心をめぐる戦いでもある」(ジョン・ポーリーン『戸口に迫るハルマゲドン』193 ページ、英文)。

話し合いのための質問

- ❶ ヨハネの黙示録に描かれている出来事の多くは、記されている文字どおりの場所で起きると信じている人を、あなたはどのように手助けすることができますか。なぜそれが聖句の誤った解釈の仕方なのか、どんな方法で彼らにわからせることができるでしょうか。
- ❷ すでに見たように、バビロンの影響力は世界中に及びます。バビロンの教えにはどのようなものがありますか。どうしたら私たちは、それらの教えを見分け、それらを選避することができるようになるのでしょうか。
- ❸ 月曜日のエレン・G・ホワイトの引用文の中で、彼女は、「教会と世俗との結合がキリスト教国全体において完全に行われる時に、初めてバビロンの墮落は完全なものとなる」と書いています。「教会と世俗との結合」という言葉について、考えてみてください。ここには私たちに対するどのような強い警告がありますか。



私たちの主イエスの再臨

暗唱 聖句

「稲妻が東から西へひらめき渡るように、人の子も来るからである」
(マタイ 24：27、新共同訳)

「ちょうど、いなづまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう」
(マタイ 24：27、口語訳)

今週の 聖句

イザヤ 13：6、9、マタイ 24：30、31、ダニエル 2：34、35、
Ⅱテモテ 4：6～8、Ⅱテサロニケ 1：7～10

安息日 午後 6/23

今週のテーマ

詩人T・S・エリオットは、「わが始めに、わが終わりあり」という1行で一つの詩を書き始めました。簡潔ながらも、彼のその言葉には力強い真理が伴っています。起源の中に終わりが存在します。この事実、私たちの名前、「セブンスデー・アドベンチスト」にも当てはまります。そこには聖書の基本的な二つの教えが含まれているからです。「セブンスデー」は十戒の安息日に相当し、地球上の生命が6日間で創造されたことの週ごとの記念です。そして「アドベンチスト」は、イエスの再臨を指し示しており、その再臨において、永遠の命の約束を含む、聖書のあらゆる希望と約束が成就するのです。

時間的に、この世の創造（私たちの始まり）がイエスの再臨（私たちの終わり、少なくともこの罪深い存在の終わり）とどれほど離れていると、これら二つの出来事は結びついています。私たちを創造された神（ヨハ 1：1～3）と、戻って来て、「最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちに」（Ⅰコリ 15：52）私たちの究極の救いをもたらしてくださる神とは、同じお方です。確かに私たちは、私たちの始めの中に私たちの終わりを見いだすのです。

私たちは今週、あらゆる終末の諸事件の中でも最後の事件、少なくとも現在の世界が関係する限りにおいて最後のことである主イエスの再臨について語ります。

どれほど私たちがイエスの再臨を新約聖書だけの教えだと思いがちであるにしても、それは正しくありません。言うまでもなく、イエスの初臨、死、復活、昇天があって初めて、再臨を取り巻く真理は十分かつ豊かに啓示されました。しかし、新約聖書におけるほかのことと同様、旧約聖書は、それが起こるずっと前から、この極めて重要な真理の手がかりや前兆を明らかにしています。新約聖書の記者たちは、イエスの再臨の教理によって新しい真理を啓示したわけではありません。そうではなく、彼らは旧約聖書の中にすでに啓示されていた真理を大いに深めたのでした。今だからこそ、十字架につけられ、復活された救い主を踏まえて、再臨の約束はもっとよく理解され、評価されうのです。

問1 次の聖句を読んでください（イザ13：6、9、ゼカ14：9、ダニ12：1）。これらの聖句は、イエスの再臨について、どのようなことを教えていますか。

疑いの余地なく、「主の日」とは、失われる者たちにとって、破滅、悲しみ、悩みの日でしょう。しかしその日は、すべての神の民、つまり「あの書に記された人々」（フィリ4：3、黙3：5、13：8も参照）にとって、解放の日でもあるのです。この主題、すなわち「主の日」が悪い者たちに対する裁きの時であるとともに、神の忠実な者たちが守られ、報いを与えられる時でもあるという主題は、旧約聖書の中に見いだされます。例えば、ある者は「主の激しい怒り」（ゼファ2：2、口語訳）に直面するが、「正義を求めよ。謙遜を求めよ」（同2：3）という召しを聞き入れる人たちは、「主の怒りの日に……隠される」（同）だろう、とあります。

問2 マタイ24：30、31を読んでください。これらの聖句は、イエスの再臨の際に失われる者と救われる者とに大きく二分されることを、どのように示していますか。

◆ 終末の諸事件が起きるとき、初めて私たちのいる側が、より鮮明になるでしょう。私たちが確実に正しい側につくよう、今、どのような選択をすることができますか。また、どのような選択をする必要がありますか。

イエスの時代の多くのユダヤ人は、メシアがローマを倒して、イスラエルをあらゆる国々の中で最も強い国として確立することを望んでいました。が、それは、(初臨であれ、再臨であれ、) イエスの来臨のあるべき姿ではありませんでした。そうではなく、神は、この罪深い、墮落した古い世界を単に手直しするのではなく、御自分の忠実な民のためにはるかに大きなものを用意しておられました。

ダニエル 2 章ほど、新しい世界が古い世界から生じるのではなく、まったく新しい、根本的に異なる創造物であることを明確に啓示している箇所は、たぶん旧約聖書の中にないでしょう。

ダニエル 2 章は、四つの偉大な世界帝国 (バビロン、メディアとペルシア、ギリシア、最後にローマ) の盛衰と、ローマがやがて現代ヨーロッパの国々に分裂することを示しています。しかし、ネブカドネツアルが夢で見た (これら四つの世界的列強の連続を象徴している) 像は、この世と私たちの主イエス・キリストの再臨後にあらわれる世との大きな断絶を示す劇的な形で終わります。

問3 ダニエル 2 : 34、35、44、45 を読んでください。この世の運命と新しい世界の性質について、これらの聖句はどのようなことを教えていますか。

これらの聖句は、イエスが戻られるときに起こることに関して、曖昧さを少しも残していません。イエスはルカ 20 : 17、18 において、この世を木端微塵に砕いたこの石に御自分を重ね合わせられました。ダニエル 2 : 35 のアラム語は、金、銀、青銅、鉄、陶土が砕かれたあと、それらが「夏の打穀場のもみ殻のようになり、風に吹き払われ、跡形もなくなりました」と読めます。つまり、イエスが戻られたあと、この古い世界は何も残らないということです。

その一方で、この古い世界の痕跡をすべて破壊した石は、「大きな山となり、全地に広がったのです」(ダニ 2 : 35)。そして、再臨の結果として生じたこの王国は、「永遠に滅びることなく、……永遠に続きます」(同 2 : 44)。

二つの終わりのうちの一つだけが、この地球という惑星にこれまでに生きたすべての人間を待ち受けています。私たちは、永遠にイエスとともにいるか、それともこの古い世界の殻とともに無へ消え去るかです。いずれにせよ、永遠が私たち全員を待っています。

テトス 2:13 を読んでください。私たちにはすばらしい希望があります。私たちの宇宙の起源について自らの信条を述べた際に、ある講師がこう説明しました。およそ 130 億年前、「一つのものすごく高密度の小さな塊が無から突然あらわれ、その塊が爆発し、その爆発から私たちの宇宙は出現したのです」と。この「ものすごく高密度の小さな塊」がいかにして無から突然あらわれえたのかについては、その講師は何も言いませんでした。彼は信じることによって、そうなったのだ、と思ひ込んだのです。

さて、今週の研究の「安息日午後」で述べたように、私たちは自分の起源の中に終わりを見いだします。ですからこの講師に従えば、私たちの終わりは、少なくとも長い目で見ると、あまり希望にあふれていません。この「ものすごく高密度の小さな塊」から生じた宇宙は、その中に存在する（言うまでもなく、人間を含む）すべてのものとともに、最終的に消滅するように運命づけられたからです。

それとは対照的に、私たちの起源に関する聖書の考えは、ずっと論理的であるばかりか、ずっと希望にあふれています。起源なる神に感謝すべきことに、私たちの長期的見通しは、とても良いものです。私たちには未来に期待を寄せることがたくさんあります。そしてその希望は、イエスの再臨にかかっています。

問 4 II テモテ 4:6～8 を読んでください。パウロはここで何について語っていますか。また、彼は何に希望を託していますか。

パウロはまもなく処刑されることになっているのですが、救いの確信と、彼が「主の出現」（II テモ 4:8、口語訳）と呼ぶキリストの再臨の望みの中で生きています。「義の冠」がパウロを待っていますが、その義は決して彼自身の義ではなく（I テモ 1:15）、イエスの義です。パウロは、再臨の約束に対する彼の望みがイエスの義にかかっていることを知っています。（牢獄の中で処刑を待つという）ひいき目に見ても憂鬱ゆううつでしかない眼前の状況にもかかわらず、パウロは、彼の長期的見通しがとても良いことを知っているのです。そしてそれは、彼が目の前の状況に目を向けるだけでなく、広い視野で見ていたからでした。

◆ あなたの目の前の状況にもかかわらず、どうしたらパウロが持っていたのと同じ希望を持つことができるのでしょうか。私たちはどうしたら広い視野を持ち、それによって得られる希望を抱くことができるようになるのでしょうか。

聖書によれば、再臨は極めて重要であるにもかかわらず、すべてのクリスチャンがそれを文字どおりの出来事、キリスト御自身が戻って来られる出来事だとみなしているわけではありません。例えば、イエスの再臨は、キリスト御自身が地球に戻られるときではなく、彼の霊が地上の教会の中にあらわれるときに起きることだと、主張する人たちがいます。言い換えれば、キリストの再臨は、キリスト教の道徳的原則が神の民の中にあわわれるときに達成されるということです。

しかし感謝すべきことに、この教えは間違っています。もしそれが本当なら、私たちにはどんな長年にわたる望みがあるでしょうか。

問5 再臨に関する新約聖書の次の聖句を読んでください。キリストの再臨の性質について、それらはどのようなことを明らかにしていますか。
マタイ 24：30、Ⅰテサロニケ 4：16、マタイ 26：64、黙示録 1：7、Ⅱテサロニケ 1：7～10

「大空は、開いたり、閉じたりするように見える。神のみ座からの栄光が、ひらめき渡るように見える。山々は、風にゆらぐ葦のように揺れ、ゴツゴツした岩があたり一面に飛び散る。嵐が近づいているようなり声がする。海は荒れ狂っている。強風のかん高い音が、破壊行為に従事している悪鬼らの声のように聞こえる。全地は海の波のように隆起し、揺れ動く。地の表面は砕け散る。地の基そのものが崩れつつあるように見える。山脈は沈下していく。人々の住んでいる島々が消えていく。罪惡に満ちてソドムのようになってしまった海港は、怒った水にのまれてしまう。神は大いなるバビロンを思い起こし、『これに神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられ』る」（『希望への光』1909、1910 ページ、『各時代の斗争闘』下巻 414 ページ）。

イエスの再臨はこのように壮大な出来事であり、私たちが知っているこの世に、文字どおりの終焉しゅうえんをもたらします。イエスが初臨の時に私たちのために成し遂げてくださったことが、再臨の時に完全に明らかにされるのです。

◆ 再臨を実感しながら生きることで、今の私たちの生き方は、どのような影響を受けるでしょうか。再臨は、人生において何が本当に重要であるかを私たちが覚えるうえで、いかに助けとなりますか。

イエスは友人であるラザロを墓から復活させる前に、このような言葉を口にされました——「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」(ヨハ 11:25)。しかしイエスは、このような途方もない主張を信じるようにと人々に求めただけでなく、それに続いて、死体が臭い始めるほどかなり前に亡くなったラザロを死から復活させられたのです(ヨハ 11:39)。

確かに、イエスを信じる者たちも死にます。しかし、イエスが言われたように、彼らは死ぬかもしれませんが、再び生きるのです。これが死者の復活にほかなりません。そしてこの死者の復活のゆえに、イエスの再臨は私たちのあらゆる希望の中心なのです。

問6 次の聖句によれば(ロマ 6:5、I テサ 4:16、I コリ 15:42～44、53～55)、イエスが戻られるとき、キリストに結ばれて死んだ人たちにどのようなことが起きますか。

再臨の大いなる希望は、イエス御自身が体験された死者の中からの復活を、あらゆる時代のイエスの弟子たちも体験することです。イエスの復活の中に、彼らは自分自身の復活の希望と確信を持っています。

問7 イエスが戻られるとき、生きている者たちにはどのようなことが起きますか(フィリ 3:21、I テサ 4:17)。

イエスが戻られるときに生きている忠実な者たちは、肉体を持ち続けますが、それは現在の状態においてではありません。その体は超自然的に、死者の中から復活させられた者たちが持つと同じ朽ちることのないものに変えられるでしょう。「生きている義人たちは、『またたく間に、一瞬にして』変えられる。彼らは、神のみ声によって栄化された。今や彼らは不死の者とされて、よみがえった聖徒たちとともに、空中において主に会うために引き上げられる」(『希望への光』1914 ページ、『各時代の争闘』下巻 424 ページ)。

◆ 永遠の命を犠牲にしても、今持ち続けたいと思うこの世の大切なものを、すべて書き出してください。どのようなものがリストに載っていますか。

イエスの再臨は、この墮落した世界における人間の罪と苦しみのお話の結末、付録、あとがきなどではありません。そうではなく、再臨はキリスト教信仰の最大の山場、最大の希望です。それなくして、いったい何でしょうか。人間の物語は、すべて死によって終わるまで、次から次へと惨めな場面、悲劇がひたすら続きます。キリストの再臨が私たちにもたらす希望を別にすれば、人生は、ウィリアム・シェークスピアが書いたように、「たかが白痴の語る一場の物語だ。怒号と狂乱にあふれていても、意味などありはしない」（マクベスより、大場建治訳）のです。それにもかかわらず、私たちにはこの再臨という希望があります。神の言葉が繰り返しそれを確証しているからです。私たちにこの希望があるのは、イエスが御自分の命と私たちを引き換えにしてくださり（マコ10:45）、その支払った額に見合うものを受け取りに必ず戻って来られるからです。

天の星々は、再臨について語りません。木々でさえ鳥たちも先触れをしません。これらのものそれ自身は、現実について何か良いもの、何か希望にあふれるものを指し示すかもしれません。が、いつの日か、イエスが戻られるとき、「ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられ（る）」（Iコリ15:52）ことを私たちに教えません。それらは、ある日私たちが目を上げると、「人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る」（マコ14:62）ことを教えません。私たちがこういったことを知っているのは、それらが聖書の中に語られており、御言葉が約束することを私たちが信じるからです。

話し合いのための質問

- ① ある人たちが信じているように、もしイエスの再臨が、キリストに従う者たちの生活の中にキリスト教的原則が十分にあらわれることにすぎないとしたら、再臨にどんな意味があるのか考えてみてください。それがどれほどすばらしい光景であろうと、結局的ところ、それはなぜ私たちに何の希望も残さないのですか。
- ② 宇宙は無から生じたという、現在よく知られている考えは、なぜ馬鹿げているのですか。なぜ人々はこのような考えを奨励し、ある人たちはそれを信じるのですか。永遠に存在なさる神、万物を創造されたお方を信じることは、なぜ宇宙に対するはるかに論理的で合理的な説明なのですか。
- ③ 永遠の命を犠牲にしても、今持ち続けたいと思うこの世の大切なもののリストを、安息日学校のクラスで分かち合ってください。リストにあるものについて、お互いから何を学ぶことができますか。もし仲間のリストに何も書かれていないとしたら、私たちの生活の中で私たちを救いから遠ざけるものが本当に何もないと、どうしたら確認できるのでしょうか。

私の伝道活動報告

2018年2期 ☐大人 ☐青年 (30歳まで)

項 目	週												
	1 4/7	2 4/14	3 4/21	4 4/28	5 5/5	6 5/12	7 5/19	8 5/26	9 6/2	10 6/9	11 6/16	12 6/24	13 6/30
1. 文書配布数 (トラクト・チラシ・雑誌・本)													
2. 授けた聖書研究数 (安息日学校クラスも含む)													
3. 講演会、講習会、訪問伝道、チラシ・トラクト配布、奉仕活動などに参加した数													

4. ☐ 7. 7. 7. の折りに参加している
5. ☐ 全員参加伝道100の提案に取り組んでいる
6. ☐ 2. 3. 4. の折りに参加している
- (4～6は数ではなく√印をつけてください)

◎統計上必要ですので、期末に信徒伝道会役員に必ずご提出ください。

2018 年度 日 没 表

月／日	札幌	仙台	東京	名古屋	大阪	広島	福岡	鹿児島	沖縄
4 / 6	6 : 06	6 : 04	6 : 06	6 : 17	6 : 23	6 : 35	6 : 42	6 : 40	6 : 48
13	6 : 14	6 : 10	6 : 12	6 : 23	6 : 28	6 : 40	6 : 48	6 : 45	6 : 52
20	6 : 22	6 : 17	6 : 18	6 : 29	6 : 34	6 : 46	6 : 53	6 : 50	6 : 55
27	6 : 31	6 : 24	6 : 24	6 : 34	6 : 40	6 : 51	6 : 58	6 : 55	6 : 59
5 / 4	6 : 39	6 : 30	6 : 30	6 : 40	6 : 45	6 : 57	7 : 03	6 : 59	7 : 03
11	6 : 46	6 : 37	6 : 36	6 : 46	6 : 51	7 : 02	7 : 09	7 : 04	7 : 06
18	6 : 54	6 : 43	6 : 41	6 : 51	6 : 56	7 : 07	7 : 14	7 : 09	7 : 10
25	7 : 01	6 : 49	6 : 46	6 : 57	7 : 01	7 : 13	7 : 19	7 : 14	7 : 14
6 / 1	7 : 07	6 : 54	6 : 51	7 : 01	7 : 06	7 : 17	7 : 23	7 : 18	7 : 17
8	7 : 12	6 : 58	6 : 55	7 : 05	7 : 10	7 : 21	7 : 27	7 : 21	7 : 20
15	7 : 16	7 : 01	6 : 58	7 : 08	7 : 13	7 : 24	7 : 30	7 : 24	7 : 23
22	7 : 18	7 : 04	7 : 00	7 : 10	7 : 15	7 : 26	7 : 32	7 : 26	7 : 25
29	7 : 18	7 : 04	7 : 01	7 : 11	7 : 15	7 : 27	7 : 33	7 : 27	7 : 26

2018 年 3 期研究予告

総題 使徒言行録

第 1 課 あなたがたはわたしの証人となる

日曜日 イスラエルの回復

月曜日 弟子たちの使命

火曜日 イエスはまたおいでになる

水曜日 五旬祭に備える

木曜日 12 番目の使徒

〈著者〉ウィルソン・パロスキ（ブラジル・アドベンチスト大学新約聖書釈義教授）

安息日学校聖書研究ガイド 『終末時代への備え』

定 価

650 円（税込）

発 行 日

2018 年 3 月 20 日

原 作 版 発 行

セブンスデー・アドベンチスト
世界総会安息日学校・信徒伝道部

日本語版発行

教団安息日学校・信徒伝道部
〒190-0011 東京都立川市高松町 3-21-8

北アメリカ支部



今期の13回献金の主な目的地である北アメリカ支部は、北米、カナダ、グアム、ミクロネシア連邦、マリアナ諸島の北部を管轄する広大な地域です。支部内の人口3億6000万人に対してアドベンチストは120万人で、300人に1人がアドベンチストという比率になります。今回の伝道地の共通点は、アドベンチスト教育をおこなっているという点です。

1. 北米アリゾナ州の学校は76年を経て荒廃した体育館と食堂を新築し、地域社会に開かれたニューライフセンターとして活用します。
2. カナダのアルベルタ州の学校は、高校の教育プログラムを拡充します。
3. マーシャル諸島のエパイでは、1978年の干魃^{かんばつ}の際にセメントに塩水をまぜて3階建の校舎が造られたため、壊れかけた壁を修理します。マーシャル諸島や日本の政府も資金を提供していますが、今回の献金によって完了することができます。

* 次のリンクの Facebook から伝道地の最新の写真を見ることができます。
ご活用ください。facebook.com/missionquarterlies

13回献金日 6月30日

今期の13回献金の一部は北アメリカ支部の教会のために用いられます。

**ADVENTIST
MISSION**
WWW.ADVENTISTMISSION.ORG

北アメリカ支部

北 極 海

カナダ

グアム

ミクロネシア連邦

マーシャル諸島

アメリカ

ワシントンD.C.

大西洋

バミューダ

バハマ・ニューギニア

ミッドウェー諸島

太平洋

メキシコ

オタワ

ハワイ諸島

教団	教会	教会員	人口
支部直轄 (単の教会)	1	19	0
アトランティック	581	119,275	33,281,560
カナダ	384	69,545	36,250,000
コロンビア	703	146,768	52,250,004
レイク	499	87,087	361,360,84
ミッド・アメリカ	454	69,418	27,494,143
ノース・アトランティック	445	100,210	14,577,317
パシフィック	710	225,820	53,244,305
サザン	1,122	286,686	61,337,833
サウスウエスタン	572	114,989	40,925,734
グアム・ミクロネシア	22	3,500	424,000
合計	5,493	1,225,317	360,605,000

- 伝道計画
- 1 アメリカ・アリゾナ州のホルフルック アドベントス
ト・インディアナ学校にニューライオンセントダー
 - 2 カナダ・アルバータ州のマスカイ アトスケタン先住
民学校
 - 3 マーシャル諸島のエハイ ミッションスクール